ESD地域リーダー人材育成のための

「ＥＳＤプログラム」ガイドブック
2019年度版

出典：文科省 HP

特定非営利活動法人 環境パートナーシップちば(略称 NPO環パちば)

この事業は、令和元年度地球環境基金助成金の助成を受けて実施しています

目　次

◆はじめに　・・・

はじめに

NPO/NGO、行政、教育関係、事業者（企業）などは、持続可能な社会を目指して、環境保全活動に取り組んでいます。
一方、私達が暮らしている地域社会では、自然環境の荒廃・少子高齢化・地域活力の低下・貧困・格差の拡大など、多様な問題が起きています。

これらの問題を解決するには、自ら課題を見つけ、学び、考え、客観的に判断し、他者と協力しながら課題解決に向けて行動する力が必要となります。ESD（Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育）は、そういった力を身に着けるための学びです。（ESD 環境教育モデルプログラム：環境省 HP より）

この ESD を推進していくためには、地域に ESD を担う人が必要です。これまで、千葉県や県内各自治体でも環境保全活動の担い手育成が展開されてきました。しかし、担い手の高齢化や団体の活力低下、働き方の変容など、今後の担い手不足も懸念されています。
さらに、2015 年 9 月の国連サミットで SDGｓ「Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標」が採択され、2030 年までの目標達成に向けた多様な主体の活動が求められているところです。

そこで、特定非営利活動法人環境パートナーシップちばは、ESD 地域リーダー人材育成を目指し、さらに、ESD 地域リーダーが活躍する場（プラットホーム）の構築などについて、地球環境基金の助成を受け 2018 年から事業を展開しています。

2019 年は、2018 年度事業の経験を活かし、主に千葉県北部地域に住む方を対象に募集を行い、参加しやすいように、船橋地区、成田地区の 2 会場で開催しました。

参加者は、地域で活躍されている地球温暖化防止、生物多様性の保全、生ごみ・繊維などのリサイクル、少年少女向けの環境活動啓発など多様な方が集まり、ESD の視点を入れるプログラム作りを学びました。また、2018 年度の地域リーダーは、サポーターの立場で協力いただきました。2019 年度もファシリテーター石井雅章氏のご協力によってこれまでのプログラムとの違いに気づき、ESD について考え方を深めることができました。

ここに成果を「ESD プログラム」ガイドブックとして取りまとめました。まだ検討途上ではありますが、ESD プログラムとは、より良いものを目指して常に改良し続けるものとしてご覧いただければ幸いです。

このプログラムは、2020 年度は実証を行い、ブラッシュアップしながら、改良していきます。本プログラムが、県内で活動している団体などの参考になれば幸いです。

また、地域プログラム作りに関心をお持ちの方は、ぜひこの事業にご参加くださるよう、お誘い申し上げます。

ESDモデルプログラムづくりの流れとプログラムシートの読み方（2018版に寄せて）

ファシリテーター 石井雅章（神田外語大学）

このガイドブックに掲載されているESDモデルプログラムの作成にあたって、千葉県内で日頃から環境活動や環境教育に取り組んでいる皆さんが集まり、活発な議論と意見交換がおこなわれました。その過程には、ESDとSDGsを考える上でとても重要な気づきが数多く含まれていたと感じています。

私は全6回のうち第2回を除く5回、ファリシテーターとしてその場に参加させていただきました。ここでは、ESDモデルプログラムづくりの流れと、そこで展開された議論を簡単に振り返りながら、どのようにして今回のプログラムシートが出来上がったのかを紹介し、実際のプログラムシートの読み方について説明致します。

【ESDモデルプログラムづくりの流れ】

ESDプログラムをつくる意義とは？

今回のESDモデルプログラムづくりに参加してくださったメンバーは、いずれも従来から地域での環境活動や環境教育を実践してきました。各自の環境活動と環境教育プログラムは、これまでの実践と試行錯誤を経ていますので、いずれも完成度が高いものばかりでした。

そこで、まず私たちが取り組んだのは、地球温暖化・水環境・資源循環・生物多様性の4グループごとに各自のプログラムを持ち寄り、それらを参考にしながら各テーマのモデルプログラムを作成してみることでした。

あるグループは、各自が持ち寄ったプログラムの比較対照表をつくり、各プログラムに共通する部分のなかにESDの要素を探ろうとしました。別のグループは、担当分野のESDプログラムをつくる上で欠かせないと思われるキーワードを出し合い、各自のこれまでの実践とは別のまったく新しいプログラムを作ろうとしました。

しかし、この作業をつうじて、参加者のなかにモヤモヤが生まれてきました。それは「なにを入れればESDのプログラムになるの？」「そもそもESDプログラムをつくる意義はなに？」といった疑問でした。ESDの考え方をあたりまえの前提にするのではなく、自分たちのアタマで考えながら試行錯誤することはとても大事な過程だと言えます。とはいえ、アタマで考えるだけではどうしても行き詰まってしまいがちですので、ひとまず次のステップに進むことにしてみました。

ESDの要素ってなに？

次のステップとして、各団体・個人がこれまでに取り組んできた環境活動・環境教育のプログラムにESDの視点を取り入れて、ESDモデルプログラムを作成してみることにしました。ESDの視点を取り入れるといってもそのままでは難しいので、ここでは、環境省『ESD環境教育モデルプログラムガイドブック』のフォーマットを参考にしました。このガイドブックでは、国立教育政策研究所教育課程研究センターが『ESDの学習指導課程を構想し展開するために必要な枠組み』という冊子で提示した「持続可能な社会の構成概念（案）」と「ESDの視点に立った学習指導で重視する7つの能力・態度（案）」を取り入れて、各プログラムをつうじて考える「持続可能な社会に必要な概念」と「身につける能力・態度」がアイコンとして示されています。そこで、私たちもこのフォーマットに準じて、各自のプログラムにESDの視点を取り入れ、アイコンを用いて整理することを試みました。

しかし、この作業をしてみるとまたモヤモヤが出てきました。それは「既存のプログラムにESDの要素を当てはめているだけじゃないの？」「そもそも、ESDの要素を入れればESDプログラムになるの？」という疑問です。

プログラムづくりをつうじた気づき

参加者との意見交換を進めるなかで気がついたことがあります。それは、「持続可能な社会を構成する6つの構成概念」と「ESDの視点に立った学習指導で重視する7つの能力・態度」を、プログラム全体が目指す学習の到達目標に対してではなく、プログラムの部分に当てはめてしまうことの危うさでした。例えば、プログラムの中でグループワークに取り組んでいるから、プログラムのこの部分では「協働性」を身につけられます、というように安易に当てはめてしまうのは問題があるということです。

また、もう一つ重要なことに気づきました。それは、上記の「6つの構成概念」と「7つの能力・態度」が、それ自体としては「ESDの視点」を示したものではないということです。「6つの構成概念」は持続可能な社会（SD）を構成する要素として示されたものに過ぎません。一方、「7つの能力・態度」は、ESDの視点に立った学習指導において重視するものとして提示されているものです。これらの概念・要素を各自のプログラムに結びつけたからといって、私たちが本来目指してきたESDの視点を取り入れたモデルプログラムになるわけではない、ということなのです。

そこで、今回のガイドブックでは、6つの構成概念と7つの能力・態度をアイコンとして表示することを避けることにしました。もし、各プログラムの内容が上記の構成概念や能力・態度と関連性があるという場合には、それぞれの欄を設けてその中に記載することにしました。

一方で、各プログラムが目指す「目標」については明確に記述することを心がけました。プログラムをつうじて、学習者がなにをできるようになるのか、という点を意識してプログラムを作成しました。とくに、目標を記述するときには「学習者が・・・」というように、学習者を主語にすることを心がけました。じつは、この考え方はESDに限った話ではなく、いま教育現場で求められている「教育者中心」から「学習者中心」への視点の変化と密接に関連しています。

さらに、各団体や参加者が、今回のESDモデルプログラムに込めた「想い」を記載してもらいました。持続可能な社会を担う人々を育てるために、各プログラムがどのような点を意識したのか、どのような工夫をしたのか、それらを言葉にすることが「ESDの視点」を取り入れたことになると考えたからです。

学校と地域をつなげる

さらにまた、別の気づきもありました。それは先述の『ESD環境教育モデルプログラムガイドブック』は、基本的に学校教育を想定した内容になっていることです。それに対し、今回のESDモデルプログラムづくりに関わっているのは、日頃から社会教育や市民活動として環境活動・環境教育に取り組んでいる方々です。参加者の気づきとは、モデルプログラムづくりをつうじて、学校教育・社会教育・市民活動をどのようにしてつなげていき、持続可能な社会（SD）を担う人々をどのように育てていくのか、ということでした。そこで、モデルプログラムのフォーマットのなかに「学校・地域等との連携上の考慮」という項目を設定し、各プログラムを実践するにあたって必要な連携上の考慮や工夫を記述することにしました。

『ガイドブック』を公開するにあたって

一方で、今回のモデルプログラムづくりのなかで議論はされたけれど、自分たちのなかでまだうまく消化できず、反映されなかったものもあります。例えば、1回の学習機会で完結できるプログラムと年間を通して実施するプログラムを同じフォーマットで記載してよいのか、ガイドブックの利用対象者を、ここで紹介されているモデルプログラムをそのまま実施したい読者と、ここでのモデルプログラムを参考にして自分たちのESDプログラムを作成したい読者のどちらに設定するのか、などが挙げられます。

ESDモデルプログラムの『ガイドブック』として公開することで、ここで紹介されているプログラムがあたかも完成されたものかのように、一人歩きして捉えられてしまう可能性があります。参加者の議論においても、『ガイドブック』の利用対象者を明確にしてから公開した方がよいのではないかという意見も出ました。しかし、最終的には「今回のモデルプログラムは完成形ではなく、常に更新されていくべきもの」であり、モデルプログラムを参考に活用される方々と一緒に更新していくべきものと考え、このようなかたちでまとめることになりました。

ここまで読み進めていただいた皆さんにはお分かりのとおり、ESDプログラムは与えられるものではなく、目の前のいる学習者と持続可能な社会づくりを結びつけるために、自分たちで考え、実践しながら、更新していくものと言えます。このことを頭の片隅にイメージしながら、以下でご紹介するそれぞれのESDモデルプログラムをご覧いただければ幸いです。

ESDモデルプログラムづくりの流れとプログラムシートの読み方（2019版に寄せて）

ファシリテーター 石井雅章（神田外語大学）

2018年度に引き続きESDモデルプログラムの作成のファシリテーターとして、新たなメンバーによるモデルプログラムづくりのお手伝いをさせていただきました。今回も多彩なバックグラウンドを持ち、日頃から地域で様々な活動をされている方々による魅力的なプログラムが揃いました。

プログラム作成の大まかな考え方は昨年度から引き継がれていますが、プログラムづくりのプロセスには若干違いがありましたので、その辺りに触れながら解説をしたいと思います。

【2019年度の特徴】

2019年度のESDモデルプログラムづくりでは、2018年度と比較して以下の3点が特徴として挙げられます。

エリアを分けて実施

1点目は、千葉県を便宜的に南北に分けて、北部エリアで活動する方々を対象に事業を実施したことです。千葉県はそれでも広いですので、メンバーの活動地域をふまえた上で成田会場と船橋会場（実際には千葉）に分散して、プログラムづくりのワークショップをおこないました。

前年度は千葉県全体を対象としてメンバーが集まっていましたので、日頃の活動をおこなうフィールドがかなり多様でしたが、今回はエリアを多少なりとも分けたこともあり、比較的似たようなフィールドや地域特性を持つメンバーが集まった印象があります。

その結果、お互いが持ち寄ったプログラムに対するコメントや相互のディスカッションにおいて、その活動やフィールドの特性を比較的理解をしてやりとりができたのではないかと感じています。また、地理的な近さがあるため、ESDプログラムの今後の展開に向けて、従来にはなかったコラボレーションが生まれる可能性もあり、その点ではエリアを分けて実施した効果が出たのではないかと思います。

少ない回数でのプログラムづくり

2019年度のプログラムづくりワークショップは、二つのエリアに分けたこともあり、各エリア3回ずつの開催となりました。メンバーが直接顔を合わせて発表や意見交換をする機会が限られていたので、ワークショップの時間内でできることにはだいぶ制約があり、各自の「宿題」としておこなう作業が多かったので、メンバーの皆さんは大変だったかと思います。

ただ、エリアを分散したことで1回あたりの参加者の数が多すぎず、これまでのお互いの活動や持ち寄ったプログラム案を比較的しっかりと、かつ複数回聴くことが出来たのではないかと思います。また、事務局の柔軟な運営により、メンバーの都合によっては成田地区と船橋（千葉）地区のワークショップを入れ替えて参加することができるように工夫をいたため、普段から忙しいメンバーの集まりにもかかわらず、毎回のワークショップへの参加度が高く、回数の制約を乗り越えて充実したプログラムが出来上がったのではないかと感じています。

「お手本」の存在

昨年度との大きな違いは、「お手本」となるプログラムがすでにあったということです。昨年度はまったく初めての状態からの取り組みでしたので、「ESDプログラムをつくる意義」や「ESDの要素」など、プログラムづくりの前提となる概念や考え方を議論し、共有することにかなりの時間を費やしました。それ自体は大変価値のあるプロセスでしたが、今年度については昨年度のメンバーが苦労してまとめて、かたちになったESDプログラムが手元にあるため、それを参考にしながら自分たちのプログラムを作成することができたのではないかと思います。

また、プログラムのみならず、昨年度のメンバーが「サポーター」として毎回のワークショップに参加し、適切なコメントやアドバイスを出していただいたこともありがたかったです。経験者が未経験者と一緒に考え、学び合うスタイルそのものが、ESDのプログラムにおいて重要だとあらためて感じました。

【ESDモデルプログラムの構成】

さて、このような特徴を通じて出来上がったモデルプログラムですが、基本的には昨年度と同じシートにまとめるかたちで提供されています。このシートは、本ガイドブックを手にしてくださった皆さまが各地でESDプログラムを実施する際に参考となる情報をまとめたものですが、プログラムの作成にあたっては、大まかに分けて3つのステップを踏んでいます。これらのステップを共有しておくことは、各プログラムの意図や工夫を理解する手助けになるかと思いますので、以下でお伝えしておきます。

ステップ1：想いと目標

プログラムづくりの最初のステップは、なぜこのプログラムをつくろうと思ったのか、提供者の想いを伝えることです。基本的に各モデルプログラムは、それぞれの日頃の活動をベースにしていますが、それらの活動には「こうありたい」「こうしていきたい」という何かしらの「想い」が込められているはずです。「想い」は活動、プログラムの価値の源泉といえます。但し、提供者の「想い」は当事者が考えているほど相手に伝わっていない場合があります。そこで、まずはそれぞれのプログラムに込めた「想い」を言語化してもらう作業から始めました。

もう一つ重要なのは「目標」です。「目標」には様々な水準があるのですが、ESDモデルプログラムは、持続可能な社会を実現する担い手を育てるための学習プログラムです。そこで、学習者の視点から目標を表現してもらうようにしました。具体的には、「学習者が〇〇をできるようになる」というように学習者を主語にした表現にすることです。団体や学校、地域社会にとっての目標を持つプログラムもありますが、その場合でもまずは学習者を中心にして目標を示すことを心掛けました。

ステップ2：プログラムの内容

想いと目標が明確になったら、それを実現するために必要なプログラムの内容を整理することです。従来から実践しているプログラムをベースにする場合、これまでやってきた方法や時間配分があるため、最初のうちはどうしてもそれにとらわれがちになります。しかし、ESDプログラムにとってもっとも大切なことは、学習者（参加者）に対して設定した目標に適したより良い学習機会を提供することです。学習者中心の視点を導入することで、従来のプログラムを見直し、時間配分を変えたり、順番を入れ替えたり、新たな話題提供を加えたり、といった様々な工夫が見えてきます。また、「想い」を実現し、「目標」を達成するために、学校や地域との連携を強化したり、他団体とのコラボレーションの可能性が出てきたりすることもあります。

ステップ3：ESD、SDGsとの関係

最後に、作成したプログラムがESD及びSDGsとどのように関係しているのかを示してもらいました。ESDについては昨年度と同様に、環境省『ESD環境教育モデルプログラムガイドブック』で提示されている「持続可能な社会づくりの構成概念」（6つ）と「学習者に習得してもらいたい能力・態度」（7つ）を参考にして記述することにしました。また、SDGsについては、プログラムと関連する17のゴールまたは169のターゲットを記載してあります。但し、これらの要素やゴール等への当てはめ自体にはほとんど意味はありません。繰り返しになりますが、もっとも大切なのはプログラムの「想い」と目指している「目標」です。各々のプログラムに込められた意図が、ESDやSDGsの観点から見たときにどのようなつながりがあるのか、それを理解するためのヒントとして位置づけてもらえればと思います。

さて、昨年度のプログラムも含めて、本ガイドブックでご紹介しているESDモデルプログラムは、あくまでも「モデル」です。皆さんがそれぞれの地域・フィールド等で実践される際には、これらの「モデル」を参考にして、それぞれの地域特性や使える資源（人的・物的・関係的なものを合わせて）を考慮して、自由にアレンジしていただければと思います。その際には、上で示した3つのステップを意識して考えると、学習者にとって意義のある効果的なプログラムになるはずです。

2019年11月にドイツ・ベルリンにて、ESDやSDGsの学びを実践している学校「ESBZ」を視察してきました。この学校は、生徒・教員・保護者がともにつくる学校として注目されているのですが、インタビューでの「学校は共同体であるべきです。なぜなら、学びの場なのですから」という言葉が印象的でした。　本ガイドブックで紹介されたESDモデルプログラムでも同じことが言えるかと思います。ここで紹介した多様なプログラムを通じて、子どもだけでなく、大人も含めてともに学び合える場が広がり、持続可能な社会を実現するための担い手が増え、つながっていくことを期待しています。

【プログラムシートの読み方】

各ESDモデルプログラムは、共通のプログラムシートの書式で記載されています。ここでは、プログラムシートの各項目になにが書かれているのかについて説明します。

対象	モデルプログラムが主な対象にする学校種や学年が記載されています。学校の単元や、これまでの実践をふまえて対象を設定してありますが、ここに記載されている対象以外に対して実施ができないというわけではありません。学校のカリキュラムや地域の状況に合わせて対象を変えることができます。
人数	モデルプログラムを実施するのに適切な人数が記載されています。人数についてはあくまでも参考であり、授業上の制約や地域の環境によって柔軟に変更することができます。ただし、プログラムによっては、グループ学習の組み方やフィールドでの作業体験などの都合により、人数を変更することが難しいものもあります。各プログラムの流れをよく理解して、人数の変更が可能かどうか考慮する必要があります。
教科／分野	モデルプログラムを実施するのに適した教科や分野が記載されています。学校の教科（単元）のなかで実施したい場合の参考にしてください。プログラムによっては、複数教科を組み合わせて実施することができるものもあります。また、必ずしも記載されている教科や分野にこだわらずに実施できるプログラムもあります。
授業時間数	モデルプログラムを実施するのに必要な時間数が記載されています。プログラムによって１回で完結するものもあれば、年間を通して実施するプログラムもあります。時間数についてもあくまでも参考ですので、各プログラムの目標を意識しつつ、学校や地域の条件に合わせて適宜調整してください。
場所	モデルプログラムを実施する場所が記載されています。一般的な教室で実施するプログラムもあれば、実験室や校庭あるいは地域の川や里山に足を運んで実施するものがあります。プログラムの目標を適切に達成するために、実施場所や環境の設定はとても大切です。各プログラムの良さを引き出すのに適した場所を見つけてみてください。
ESDプログラムへの想い	モデルプログラムを作成した団体・人々の立場から、今回のESDを意識したプログラムづくりにあたって大切にしたこと、重視した視点、意識した考え方などが記載されています。プログラム作成側の想いとプログラム実施側の想いが重なり合うことで、学習者の学びがより充実したものになると考えています。
目標	モデルプログラムをつうじて、学習者がなにをできるようになることを目指しているのかについて記載しています。できるだけ「学習者」を主語にして表現するように心がけましたので、プログラムの提供者側の視点ではなく、プログラムをつうじて学ぶ側の視点から、ぞれぞれのプログラムが目指していることを理解してもらえればと思います。
特徴	モデルプログラムの特徴が記載されています。従来のプログラムや同じ分野の類似したプログラムとの違い、プログラムを構築する上で工夫した点、プログラム実施に関連する地域の特性などが記載されていますので、各プログラムを選択する際の根拠や理由として参考にしてください。
持続可能な社会づくりの構成概念	環境省『ESD環境教育モデルプログラムガイドブック』で提示されている概念です。持続可能な社会（Sustainable Development：SD）を実現するための構成概念として、多様性・相互性・有限性・責任性・連携性・公平性の６つが示されています。各モデルプログラムと関連性のある概念がある場合に、プログラムと構成概念のつながりについて記載されています。
重視する能力・態度	モデルプログラムをつうじて学習者に修得してもらいたい能力・態度について記載されています。各プログラムでの学びをつうじて、学習者は多様な能力・態度を身につけることができると考えられますが、ここでは、環境省『ESD環境教育モデルプログラムガイドブック』で提示されている①批判的に考える力、②未来像を予測して計画を立てる力、③多面的、総合的に考える力、④コミュニケーションを行う力、⑤進んで参加する態度、⑥つながりを尊重する態度、⑦他者と協力する態度という７つの能力・態度との関連性が記載されています。

プログラムの流れ	モデルプログラムを実施する際の手順が記載されています。 ・「時間」欄には、プログラム内でおこなう各内容に掛かる時間が記載されています。１回で完結するタイプのプログラムでは分単位で記載されている場合がありますし、年間をとおして実施するプログラムの場合は、１回目、２回目といった回数が記載されている場合があります。 ・「ねらい」欄には、プログラム内で実施する各内容をおこなう理由がそれぞれ記載されています。ここでの「ねらい」とは、ESDモデルプログラムが全体として目指す「目標」のことではありません。例えば、アイスブレイクとしてグループメンバーで自己紹介をする場合の「ねらい」とは、学習者同士が打ち解けること、になります。また、プログラムの最後に振り返りシートへの記述をおこなう場合の「ねらい」とは、今回のプログラムでの各学習者の気づきを言語化すること、になります。モデルプログラム全体が目指すべきものが「目標」で、プログラム内で実施する各内容が意図しているものが「ねらい」ということになります。 ・「方法・場所」の欄には、プログラム内での各内容の実施方法や実施場所が記載されています。学校や地域の状況に合わせて、方法や場所を変更することは可能ですが、各内容の「ねらい」をふまえて、変更する方法や場所を選択する必要があります。 ・「内容」の欄には、文字通りプログラムのなかで実施する各内容が記載されています。時間的な制約などによって順番を入れ替えたり、スキップしたりすることがあるかもしれません。その場合は、モデルプログラムの「目標」をきちんと理解して、内容が変更されても目指すべき目標が達成できるのかどうか、学習者に期待される学びが実現できるのかどうか、考慮する必要があります。
SDGsとの関連性	モデルプログラムがSDGsの目標（17のゴール・169のターゲット）と明確なつながりがある場合、関連するゴールもしくはターゲットが記載されています。 ESDとは「持続可能な世界（SD）」を実現する人々を育てるための学びの機会です。 SDGsは「持続可能な世界（SD）」を実現するために、2030年までに達成すべき具体的な目標です。ESDもSDGsも「持続可能な世界（SD）」を実現するという共通の目標を掲げていますので、モデルプログラムをSDGsとのつながりという観点から理解することも大切な視点と言えます。
学校・地域等との連携上の考慮	学校や地域と連携してモデルプログラムを実施する上で、考慮すべきことが記載されています。学校や地域のおかれている状況、活用可能な資源などは多様です。ある学校（地域）で成功したプログラムをそのまま他の学校（地域）に適用できるとは限りません。学校や地域それぞれの立場、状況を理解した上でプログラムを実施することが求められます。
その他補足事項	モデルプログラムを実施する上で考慮すべき事項、あらかじめ準備すべき事柄などについて記載されています。

【ESD モデルプログラムフォーマット】

プログラム名

対　　象：
人　　数：
教科／分野：
授業時間数：
場　　所：

ESD プログラムへの想い	
目標	
特徴	
持続可能な社会づくりの構成概念	
重視する能力・態度	

プログラムの流れ

時間	ねらい	方法 場所	内容

SDGs との関連性	
学校・地域等との連携上の考慮	
対象を発展させる可能性	
その他補足事項	

プログラム作成者名（団体名）:

環境活動家グレタ・トゥーンベリさんとめぐる “#未来のための金曜日”の旅

対　　象：中高生

人　　数：最低 6 名

教科／分野：気候変動

授業時間数：３回（各 3 時間）

場　　所：室内

ESD プログラムへの想い	国連の温暖化対策サミットで各国の代表を強い口調で非難し、早急な温暖化対策を求めたスウェーデンの 17 歳のグレタ・トゥーンベリさん。2018 年 8 月から金曜日に学校を休んで国会議事堂の前に座り込み地球温暖化対策を求める運動をたった一人で始めました。この活動は“＃未来のための金曜日”と呼ばれています。彼女の行動力に感動し、グレタさんと同世代の中高生と彼女がどうしてこのような活動をすることに至ったのか共に考えたいと思いました。グレタさんの活動、スピーチからキーワードを見つけながら､彼女のメッセージの意図するところを深く掘り下げ、最終的には行動をおこす、「気候活動家」をめざします。
目標	・学習者が、気候変動によって起きている地球上の危機を直視する。（理解） ・学習者がその危機を自分ごととして捕らえる。（納得） ・学習者が「何とかしなくては」と切実に感じる（共感） ・学習者が自分にできることは何かを考え、実際に行動を起こす。（行動）
特徴	グレタさんのメッセージのキーワード： ・一般の人々は気候変動について「なにも知らされていない」 ・「気候正義」 ・「大切なことは行動を起こすこと」 グレタさんの活動を知ることで、気候変動（地球温暖化）によって地球全体が待ったなしの危機に瀕していることを理解する。その結果学習者が問題解決のために何か具体的に行動を起こさなくてはという切実な思いを持つことを第一の目標にしたい。（行動は後からついてくる） 中でも、「気候正義」について深く掘り下げたい。
持続可能な社会づくりの構成概念	・責任性・公平性：ほんの一握りの富裕層が現在排出している温室効果ガス（二酸化炭素、メタンガスなど）によって、地球温暖化が進み、影響を受けているのはほとんど温室効果ガスを排出していない貧困国であり、若い将来世代である。また、地球上の生態系に多大な悪影響を及ぼしている。これは国家間、世代間、地球上の生物間における不公正であり、正義の問題である。 ・有限性：地球が吸収できる炭素の量（炭素予算）は決まっていて、このペースで排出し続けると 8 年から 10 年で使い果たしてしまう ・多様性：地球は生命の共同体であり大気も水もすべてつながっている。地球上の生態系はお互いに支え合ってバランスを取り合っている。気候危機によってそのバランスが崩れようとしている。 ・相互性：経済のグローバリズムにより、気候変動の問題は決して遠い地域で起きていることではなくつながっている。

	・連携性：気候危機の問題は世界レベルで解決するべき問題であり、国や地域のパートナーシップが欠かせない
重視する能力・態度	① 共感する力：問題を見て見ぬふりをせず、直視し、相手の立場に立って理解する。 ② 批判的に考える力：問題解決の為、現在の社会の仕組みを変え、新しい常識を生み出す必要がある。 ③ 多面的、総合的に考える力：自分の身の回りで起きていることだけではなく、地球規模の視点を持つ。 ④ 未来像を予測して計画を立てる力：問題点と原因が明らかになったら、解決策を考え行動する。

プログラムの流れ

時間	ねらい	方法 場所	内容
第 1 回　気候危機を知る			
20 分	安心して自分を開き、自由に意見が言える場づくりをする。	アイスブレイキング	・自己紹介（共通点を見つける） ・手を使ったアクティビティ（こころを開く） ・グランドルール作り（どんな意見でも尊重するなど）
5 分	このプログラムでは地球規模での視点が必要であると認識する		地球の映像 世界地図を見せる グレタさんの出身国スウェーデンに印をつける 「さあ、旅を始めましょう！」
5 分	スウェーデンを旅する グレタさんを知る		TED のグレタさんのスピーチを見る
15 分	同じ年代のグレタさんとの共通点、より知りたい点を整理することで共感できる下地をつくる。		スピーチから受け取ったメッセージは何か。共感できるところは何か。疑問点（より知りたいところ）はないか。なんでも印象に残った事、言葉をワークシートに書き出す。 右半分はプログラムのふりかえりの為に空けておく。
90 分	気候変動の現状を科学者の分析、数値などから理解する		映画「不都合な真実」を見る
30 分	「不都合な真実」から受け取ったメッセージを整理する	4～6 人のグループで話す	地球温暖化が原因で出ている影響をポストイットに書き出し世界地図に貼る。 ※この時点で原因、解決策が浮かんだら書き出してもよい。次回以降のため世界地図の下に貼っておく。
15 分	ふりかえり：問題を地球規模でとらえる		世界地図を見て問題が地球規模であることを確認する。 ワークシートの右半分に今感じている思いを書く。
第 2 回　気候正義を知る			

15 分	安心して意見が言える場づくり		・自己紹介（共通点を見つける） ・グランドルールの確認
45 分	「気候正義」とは何かを知る		「クローズアップ現代」を見る
30 分	「クローズアップ現代」を見て受け取ったメッセージを整理する	4～6 人のグループに分かれる	「気候正義」を中心に温暖化が原因で出ている影響をポストイットに書いて世界地図に貼る（ポストイットの色を前回とは変える） ※人間だけでなく、生物、生態系への視点もわすれないようファシリテートする。 前回同様、原因、解決策も書いて良い。地図の下に貼っておく。
10 分	問題を地球規模でとらえる		世界地図を見ながらこの問題が地球規模であり、自分と繋がっているのだということを確認する。
40 分	「気候正義」の問題を作り出す構造をとらえる 解決を阻むものは何だろう。		「進撃の巨人」で「なりきりディスカッション」 「進撃の巨人」ストーリーのまとめを説明する。 ・安全を守る壁の絶対性を説く支配層 →a:王政 b:憲兵団 ・解決策を探るべく壁の外で戦う戦士 →憲兵団 ・王政の政策に疑問を持たない一般の人々 の 3 グループにわかれ、それぞれが何を大事にしているか議論し、そのためにどう行動するかを発表する
40 分	「気候危機」の問題に当てはめて考える		「気候危機」になぞらえて考えてみる。 それぞれのグループは現代社会において何に当てはめることが出来るだろうか。 問題点とどう行動するべきかを発表する。
第 3 回 「気候活動家」への道			
15 分	安心して意見を言える場づくり		・自己紹介 ・グランドルールの確認
10 分	問題を地球規模でとらえる		・前回までに作り上げてきた旅の軌跡を、世界地図を見ながら確認する
10 分	「思い」をシェアする		・これまでのプログラムを終えて、今現在なにか行動に起こしたい、と思っていることがあればポストイットに書く。 （無くても良い。なければ一番心に残っていることを書く）
30 分	〃		トーキングスティックを使い、第 2 回までのプログラムを経て、現在の「気候危機」に対する思いを語る 語り終わったらポストイットを世界地図の下に貼ってゆく
30 分	行動をおこす為の準備をする		具体的に行動をおこす為にできることは何かを話し合う ・問題のカギを握っているのは何か、誰なのか ・個人で出来ることはあるか ・グループで出来ることはあるか
45 分	具体例を知る		「NHK スペシャル」を見る ・自治体レベルでの取り組み ・世界における活動の具体例 ・ESD プログラムの紹介など
30 分	自分の行動を伝え、「ムーブメント」にしていくために		・「行動をおこしたいと思っている」=「気候活動家」「環境活動家」「フェミニスト」「人権活動家」等々 自分にタイトルを付ける。今回は名刺を作ることを提案する。実際に PC で作成する。手書きでも良い。それを持ち歩きことあるごとに配り、自分の活動をアピールしよう。

SDGs との関連性	目標 7　エネルギーをみんなにそしてクリーンに　目標 10　人や国の不平等をなくそう 目標 13　気候変動に具体的な対策を　　目標 14　海の豊かさを守ろう 目標 15　陸の豊かさも守ろう　　目標 16　平和と公正をすべての人に 目標 17　パートナーシップで目標を達成しよう
学校・地域等との連携上の考慮	地域の中高等学校で行う際は、１回を５０分×２時限とし、３週にわたって行う。
対象を発展させる可能性	・大学と連携し、大学生に実施することも可。 ・小学生年代であれば、高学年から（５・６年生））実施する。その際は「不都合な真実」「クローズアップ現代」は小学生向けのコンテンツに変更する。
その他補足事項	・小学生年代までに自然に親しみ、自分が地球の一部であることを感じられるプログラムを多数経験しておく。例えば ESD プログラム作成者を招き、実施してもらうなど。 ・学習者がおこしたい行動の内容が、ESD プログラム集の中にあれば、作成者を招き、その解決策として実施する。 →地域とつながり、少しずつ運動の輪が広がってゆく

プログラム作成者名（団体名）：松本さやか（ガールスカウト千葉県第 12 団）

昔カレンダー「二十四節気」から学ぶ地球温暖化

対　　象：（小学校 4 年生～6 年生）
人　　数：（5 人～40 人）
教科／分野：（理科、社会、国語）
授業時間数：（45 分）授業開催の 2，3 か月前から生徒が行う作業がある。
場　　所：（教室）

ESD プログラムへの想い	自らの体験、観察をベースにした昔カレンダー「二十四節気」作りを通して、 SDGs の重要な課題である地球温暖化が季節に特有な自然、気候に影響していることを知り、地球温暖化を自らの問題として考えるきっかけとなるようなプログラムとしたい。
目標	地球温暖化を自分の事として考え、行動できるようになる。
特徴	**季節の移り変わりを表す二十四節気から地球温暖化を考えていく** ・二十四節気という昔からのこよみを用いたカレンダーづくりをすることで、季節の移り変わりが生き物や草花などの自然環境と密接に関係してきたことを知り、自分たちの衣食住という生活の基本に影響をしていることを理解する。 ・自然環境が今までとは違ってきていることを気づき、地球温暖化の影響が現実に起きつつあることを学ぶ。 ・地球温暖化がなぜ起きているかを学び、学習者自身が地球温暖化防ぐため、また、適応していくため何をすべきかを考えるようになる。
持続可能な社会づくりの構成概念	・多様性：生活が季節に特有な多種多様な生き物、植物の恩恵を受けていることを知る。 ・相互性：季節に関係する行事などが自然、文化、農作業などと深く結びついていることを理解する。 ・有限性：太陽からの無限のエネルギーの恩恵を受けていても、食べ物など、異常気象の影響を受ける限りあるものであることを気づく。 ・責任性：昔から続いていた自然との共生を知ることで、地球温暖化を防ぐことの重要さを感じる。 ・連携性：衣食住など普段の生活で必要なものが、異常気象の中でも多くの人の努力で供給されていることに気づく。 ・公平性：太陽と地球の関係がもたらす季節という大きな自然の営みを公平に受けるべき世界の人々が、実際は様々な状況にあることを気づく。
重視する能力・態度	②<u>未来像を予測して計画を立てる力</u> 二十四節気という 2500 年前にできた農業のためのこよみを知ることで、今起きている地球温暖化がどのような未来を招くかを考えるきっかけとする。 ③<u>多面的、総合的に考える力</u> 季節を巡る自然環境と自分たちの生活が関係していることを二十四節気のカレンダーづくりで学ぶ。 ④<u>コミュニケーションを行う力</u>　⑤<u>進んで参加する態度</u>　⑦<u>他者と協力する態度</u> こよみづくりをチーム共同で話し合いながら作業することで④⑤⑦の力をつける。
プログラムの流れ	

時間	ねらい	方法・ツール・場所	内容
事前準備作業			
	生き物、草花、食べ物、生活、行事などや、気象に関しても、暑いと感じた日、台風の来た日などを記入することで自分たちの日常の生活が季節とは無縁ではないことを気づく。	季節ボードの作成 教室等	「事前に準備してもらう季節ボードの説明」 ・1 年間を立春～立夏、立夏～立秋、立秋～立冬、立冬～立春に分けた季節ボードはその時の季節に合わせたものを授業の 3 か月前に準備し教室の壁に貼っておく。 ・このボードは二十四節気の日にち合わせおおよそ 15 日間の縦の列に区分されているが二十四節気の名称は空欄にしておく。 ・横の行の欄は行事、スポーツ、食べもの、生きもの、植物、天候などに区分されたものになっている。 ・3 か月前から生徒にその日に見た、経験した、聞いたことを自由に用意したカードに書いて貼る。 ・季節発見カード、お天気カード、誕生日カードを準備 ・ボードへ貼るカードのヒントとして節気ボードの横に以下のような設問を掲示しておく。 ・季節発見カードとして 「どんな行事をした？どこに出かけた？どんなスポーツをした？どんなものを食べた？ 見た植物は？見た生きものは？」 ・お天気カードとして 「暑かった日の最高気温は？日本に台風が来た日は？ 雨がたくさん降った日は？洪水などの災害あった日は？」 誕生日カードとして 「誕生日があった人は自分の顔と名前を」 例）秋バージョン：夏休み前に 8 月 7 日立秋から始まって霜降の終わる 11 月 6 日までの季節ボードを準備、授業は 11 月末から 12 月に実施
授業当日プログラム			
4	太陽と地球の動きが季節を作っていることを理解し、宇宙という、大きな自然の中に人が生かされているということを感じる。	全体講義 ・ゲーム ・スライド ・動画 教室	・自己紹介 ・今日の授業を紹介 ・季節はどんなものがあるかの質問からスタート 春、夏、秋、冬を引き出す。 ・四季がどうして起こるか質問 地球上で日本が四季のある恵まれた自然環境を持っていることに気づく。
4	二十四節気が春夏秋冬にどのように割り振られているかを知る。	全体講義 ・スライド 教室	・日本には四季だけでなく、1 年を 24 に分けた二十四節気というものが千年以上前からあることを学ぶ。 ・気温と二十四節気のグラフで冬至、夏至、春分、秋分などの関係を知る。 ・その年の二十四節気の日にちを示したものが配布される。 ・宿題で作成したボードに該当する二十四節気を貼る。

15	季節と自分たちの生活が深く結びついていることを感じ、昔から続いてきた季節特有の生き物、草花、食べ物が変化していることを気づく。	グループ活動（4～5人）	・完成した二十四節季（秋）ボードを見ながら、季節に関係するカードがあるか考える。 ・それぞれのグループからどうしてそう思ったかを発表。
		グループ活動（4～5人）	・季節と関係ないものはないか、または季節に合っていなものはないかなどを考える。 ・それぞれのグループからどうしてそう思ったか発表。
7	気温や降雨の平年値からの変化を示すことで気候変動が起きていることを具体的に気づいてもらう。 生きもの、植物などの自然現象も起こり方が違っていることに気づいてもらう。	全体講義 ・クイズ パネル 教室	・気象クイズで気候のこと、台風、秋雨前線、猛暑日などを学ぶ。 ・この1年の気温のグラフを見て、平年の気温と比べて今年の夏は暑かったことなどを知る。 ・秋の七草クイズ、秋の虫、果物、お月見などのクイズを通して昔からあった秋の自然を知る。 ・紅葉の時期の変化、トマト、キュウリなどの夏野菜が晩秋に食べられることなどを気づく。 ・季節の進み方が昔とは違ってきていることを気づく。
15	季節特有の豊かな自然を守るために、地球温暖化を防ぎ対応する重要さを知り、自身が何をすべきかを考えられるようになる。	全体講義 ・スライド ・クイズ ・動画 教室	・気候の変化の背景として地球温暖化が進みつつあることを理解する。 ・地球温暖化がなぜ起こっているかを学ぶ。 ・地球温暖化がこのまま進むと 2050 年にはどんな気候になっているかを映像で理解する。 ・地球温暖化を防ぐことやそれに適応するために何が必要かを知り、学習者自身ができることは何かを考えていく。

SDGs との関連性	2.4「生態系を維持し、気候変動や極端な気象現象対する適応能力を向上させ、持続可能な食料生産システムを確保し、強靭（レジリエント）な農業を実践する」 6.6「水に関連する生態系の保護・回復を行う」 7.2「再生可能エネルギーの割合を大幅に拡大」 11.4「世界の文化遺産及び自然遺産の保護・保全の努力を強化」 12.8「持続可能な開発及び自然と調和したライフスタイルに関する情報と意識を持つ」 13「気候変動に具体的な対策を」 14「海の豊かさを守ろう」 15「陸の豊かさも守ろう」
学校・地域等との連携上の考慮	・事前準備では現場の先生の協力が必要となる。 ・スタッフの手があれば、チームごとに春夏秋冬を分担して競わせる進め方もある。 ・児童育成クラブや公民館など地域連携の講座として、授業時間を 60 分～90 分と長くとることで事前準備なしの単発の授業として実施することもできる。
対象を発展させる可能性	・地球温暖化だけでなく食料、水、エネルギーなど SGDs に密接なプログラムへ展開もできる。 ・小学校 5、6 年生、中学生であれば、季節に行った活動、見た生物、植物、気候、食べ物の他に、この時期に起こった出来事を記入してもらい、SDGs の 17 の目標と出来事の関係を考えてもらうような授業に発展できる。
その他補足事項	・講師は準備段階のカレンダーを事前に見て、当日の授業内容にフィードバックする。 ・準備するツール：　パソコン、プロジェクター、節気ボード、記入用カード（季節発見カード、お天気カード、誕生日カード）ポストイット ・本プログラムは地球温暖化防止全国ネットの教材をベースに、さらに地球温暖化へ踏み込んだプログラムとして作成した。

プログラム作成者名：島野圭司（温暖化防止うらやす）

浦安三番瀬をもっと知りたい！

対　　象：（小学生以上）

人　　数：（２名～２０名）

教科／分野：（理科、社会）

授業時間数：（80 分～120 分）注：大潮の最大干潮時から１時間程度以前開始が望ましい

場　　所：（干潟、雨天時は学習室など）

ESD プログラムへの想い	普段意識することがない身近な自然環境（三番瀬）が持つ意味とそこに生息している生物を知ることにより人間が享受している自然からの恩恵と人間が及ぼす自然への影響について考える機会になれば良いと思います。
目標	学習者が海辺の生き物に関心を持つようになる。 学習者が干潟の浄化能力を学習できるようになる。 学習者が干潟や浅海域の重要性を考える。 学習者が環境保護の方法を習得する
特徴	三番瀬というフィールドで行うプログラム。生き物を採集するなど五感を使って体験することにより、より多くの気づきが得られる。
持続可能な社会づくりの構成概念	多様性　異なる自然環境において生活する生き物の存在と意味を理解する 相互性　海辺の生き物から受ける恩恵と人間が与える影響を理解する 有限性　環境資源の有限性を知る 責任性　干潟や浅海域を保全・保護していくことを理解する 連携性　個人が社会に連携することの重要性を理解する 公平性　自然環境が与える影響は人間を含めすべての生物に関わることを理解する
重視する能力・態度	①　批判的に考える力 ②　未来像を予測して計画を立てる力 ③　多面的、総合的に考える力 ④　コミュニケーションを行う力 ⑤　進んで参加する態度 ⑥　つながりを尊重する態度 ⑦　他者と協力する態度 ⑧　人が環境に及ぼす影響と自然からの恩恵を感じ取れる能力
プログラムの流れ	

時間	ねらい	方法 場所	内容
15 分	三番瀬の地理や規模、潮の干満のメカニズムと生き物の関係を理解する 安全面においての注意事項を確認する	学習室など	月の満ち欠け図やタイドグラフなどを使って潮の干満のメカニズムと水際線の存在が生物の多様性に関連していることを解説する。 干潟でよく見られるアサリなど二枚貝をピックアップし生態などを解説する。 危険生物の存在や護岸などの滑りやすい状況を図などを使って徹底する。
30 分 ～ 60 分	参加者が生き物採集をすることで生き物の住処の実際を知り捕まえ方または注意点などを実践から学ぶ	三番瀬	どういう場所に生き物がいるのかを観察し、実際に タモ網やシャベルなどを使って生き物を採集してみる。 （事前にアサリなど２枚貝を採取するなどして浄化実験の準備をする）
15 分	手に取って観察することにより生活環境とその意味を学習	三番瀬	水槽など容器に入れて採取した生き物を観察し 生き物の形態や特徴から生態を想像する。 ２枚貝などの浄化実験の結果を観察する
20 分	振り返りとして 人間が自然界に及ぼす影響と人間が出来ることを考える	学習室など	アサリなど三番瀬で生息している生き物の餌がどこからきて、その生き物が生きるために行っていることが海水のろ過につながっていることや海産物として食卓に並ぶことで人間に大きく貢献していることなど物質循環の観点から三番瀬の存在意義と保護保全の必要性を感じてもらう。
SDGs との関連性	11.住み続けられるまちづくりを（里海として地元愛を育む） 12.つくる責任、つかう責任　（漂着ごみからプラごみ問題を考える） 14.海の豊かさを守る　（生き物を観察することにより多様性を知る） 15.陸の豊かさを守ろう　（干潟と河川の関係を理解し陸の豊かさの必要性を理解する）		
学校・地域等との連携上の考慮	フィールドの危険性を理解してもらい、できるだけ多くのサポートを要請する。 また潮の干満など自然のサイクルにあわせた予定となるのでスケジュール調整を綿密にする必要がある。		
対象を発展させる可能性	学習を積むことにより教える立場にもなれるなど発展させられる可能性がある。 ピックアップする対象を生き物から潮の干満など視点を変えることにより広い視野でフィールドをとらえることが出来るようになる。		
その他補足事項	季節に応じて濡れても良い服装と着替え。 軍手やゴム手袋・タモ網・バケツ・観察ケース ファーストエイドキット、飲料水		

プログラム作成者名（団体名）：今井　学（浦安三番瀬を大切にする会）

アップサイクルで知るモノの価値

対　　象：小学校４-６年

人　　数：１クラス　３０-３５人

教科／分野：総合学習

授業時間数：45 分×２

場　　所：室内

ESD プログラムへの想い	安全安心安価に買える衣料品が巻き起こす労働問題や環境問題。またそれらがどれだけ無駄に作られ、どれだけ棄てられていくか？そしてその事で拍車がかかる環境汚染 モノが簡単に手に入る時代だからこそ忘れがちなその価値をアップサイクルと言う体験をもとに理解してほしい。本来、日本人が持ち合わせていた「MOTTAINAI」と言う精神を取り戻す。
目標	学習者が簡単に安価で、安全に、安心に何でも手に入る裏側にある労働問題や環境負荷への実態を理解し、モノの大切さや短サイクルで手放すことにより生じる環境負荷の真実を理解する。
特徴	自分ごとにして貰う為、自らアップサイクルした作品に価格を付けて貰い、労働賃金と見合うか？どうかを検証する事でモノの価値の理解を深める。
持続可能な社会づくりの構成概念	責任性：ｻｽﾃｲﾅﾌﾞﾙな生産とエシカルな消費の両面を理解する事で、双方の立場から物事を捉える力を養う。 有限性と公平性：自らの行いが遠くの誰か？を犠牲にし、未来の誰か？に負担を掛ける事がないのか？検証を行う。
重視する能力・態度	③多面的、総合的に考える力：手作り品のアップサイクル品を作る事で個性や多様性を尊重する能力 ⑦他者と協力する態度：２人１組で作業する事で他者と協力する態度

プログラムの流れ

内容：衣料廃棄品を使ったアップサイクル体験
方法：講義とワークショップ
場所：教室
ねらい：アップサイクル体験を通して、モノがあふれる実態とモノの本当の価値を理解する。

時間	ねらい	方法 場所	内容
３０分	衣料品が作られる工程を理解する	教室	T シャツが作られる工程を順を追って説明し、どのタイミングでどのような環境負荷、労働負荷が掛っているかを説明

１５分	アップサイクルとは？		アップサイクルの必要性を実際にアップサイクルされた商品事例と共に紹介（海外での最新プロダクションの紹介や日本で伝統的に行われていた手法の紹介） リサイクルとの違いについて検証
２０分	衣料品アップサイクル		各自２人づつのペア―になり、衣料品からアクセサリーをアップサイクル.（可能であれば各家庭の古着 T シャツを持参） その際、製作時間を記録
5分	作った作品の価値を決める。		各自が作った作品に販売価格を付ける。 時給９００円として製作時間から人件費を試算 その他、販売する為にかかる経費項目を列挙
5分	発表		一番高く設定した人と低く設定した人がそれぞれ発表
5分	解説		社会・環境・経済の３つにおいてバランス良い価格とは？
5分	再検証		解説を元に各自再検証
5分	新たな発想を生む		家庭でアップサイクルできるモノを考える。

SDGs との関連性	１２．つくる責任　つかう責任 １３．気候変動に具体的な対策を
学校・地域等との連携上の考慮	
対象を発展させる可能性	親子参加であれば小学校低学年からでも参加可能 アップサイクルする商品が各年齢層のターゲットにあえば、中、高生にも対応可能
その他補足事項	各自家庭で使用していない T シャツ

プログラム作成者名（団体名）：梶原　誠（WAcKA）

環境活動と市民活動のコラボ！
生ごみの堆肥化（ごみ減量）と地域の関わりを考える
（防災・町会活動・介護・仲間づくり・子ども食堂 etc）

対象　　：大人

人　　数：10～20 人

分　　野：ごみ・循環社会

授業時間数：2 時間

場　　所：室内

ESD プログラムへの想い	野菜を自家栽培している方が余った野菜を、子ども食堂に寄付されていることを知り、家庭から出る生ごみでできる堆肥で作る野菜が、個人の満足だけでなく社会とつながることができると思い、このプログラムを作成しました。 ・段ボールコンポストでの生ごみ堆肥化。 ・出来上がった堆肥を使って、社会活動に生かす。 ・堆肥化という個人の環境活動を、学習者ならどう使うか広がりを考える。 ・個人の好きで楽しい環境活動が社会とどうつながるか考えてみる。
目標	・学習者が自分の関心ごとや得意なことが、どう世の中と関わっていけるのかを考える過程を習得する ・学習者が生ごみ堆肥をできるようになる。 ・学習者が地域にある課題を解決する手段として、生ごみの堆肥化やその他の環境活動を取り入れることを学ぶ
特徴	＊環境活動が他の活動とつながる可能性を感じ、堆肥化（環境活動）を道具として使って何かできないか考えてみることが特徴です。 ＊環境活動は、一つの行動で完結し多様な人々への関心が持たれづらい。そこでそれぞれの活動や関心のある事柄に結び付けるアイディアを出していただくのが特徴です。
持続可能な社会づくりの構成概念	多様性・・生ごみの堆肥化からの広がり 有限性・・現状捨てられ、燃やされている生ごみが資源となり有効活用できることを知り、循環の環を完成させる。 連携性・・生ごみを堆肥化するという個人の活動を、他の事業・まちづくりになどに使ってもらう。
重視する能力・態度	③多面的、総合的に考える力、 ④コミュニケーションを行う力 ⑥つながりを尊重する態度、 ⑦他者と協力する態度

プログラムの流れ

内容：生ごみ堆肥化を知り、社会活動の課題解決とむすびつけてみる

方法：①ダンボールコンポストの作り方を学ぶ
②数人のグループに分かれ生ごみの堆肥化を真ん中に、思いつくキーワードをつなげていく
③堆肥化行動を中心に広げたキーワードと社会活動や課題解決を結びつけてみる
④結びつきを発表する
場所：室内・WS 形式の机配置
ねらい：環境問題の解決策が社会の課題と結びつく発想を引きだす。

時間	ねらい	方法 場所	内容
30分	段ボールコンポストによる家庭の生ごみの堆肥化を知る	講義 室内	・自治体のごみ減量の課題、紙ごみと生ごみの課題を知る ・個人でも簡単にできる生ごみ堆肥化を知る。 ・好気菌による生ごみの堆肥の手軽さと失敗が少ない事を知る ・メリット・デメリットを知る
15分	・家庭での段ボールコンポスト堆肥化から、関連するものを書き出し広がりを感じる	WS 室内	・ホワイトボードに「生ごみの堆肥化」から「つながりのあるキーワード」を参加者から出してもらい記入、図にしてつないでいく。もしくは、参加者数人でグループを作り模造紙に記入し発表する
45分	生ごみ堆肥化と社会問題や身近な気になることと結び付けてみる	ＷＳ 室内	身近な課題もしくは、前述の図の中から課題を選び、具体的な組織図関係図などを作って、課題解決にあたる。
30分	課題と解決策の発表 各グループ別		各々のグループの発表と意見交換

SDGs との関連性	２．飢餓をゼロに　（余っている所から必要な所へ） 11．住み続けられるまちづくり 12．つくる責任つかう責任（12－3 食料の廃棄削減 12－5 廃棄物の発生削減） 13．気候変動に具体的な対策（可燃物としないことで CO2 削減） 17．パートナーシップで目標達成
学校・地域等との連携上の考慮	
対象を発展させる可能性	＊子ども食堂に参加の方に生ごみを持参していただき、堆肥を作り、畑を持っている方たちと交流してあまり野菜を回していただくルートを作る。畑を作っている個人が安心・安全な生ごみからの堆肥を作って使った野菜を、子ども食堂などに寄付する。 ＊町会で生ごみ堆肥化や公園の落ち葉の腐葉土づくりを通して、仲間づくりや、花壇などの地域活動に生かしていく。災害時の食料の足しになるようなミニ野菜花壇を作る。 ＊防災の備品として、生ごみを処理できる段ボールコンポストを設置してもらう。
その他補足事項	WS の用意。付箋、マジック、模造紙、ホワイトボード、テープなど 段ボールコンポストの作り方の説明 CD、パソコン、プロジェクター、スクリーン 段ボール、基材など

プログラム作成者名（団体名）：　植木恭子　（柏 段ボールコンポスト研究会）

可燃ごみを減らそう！生ごみたい肥化プロジェクト

対　　象：ご近所住民（自治会）

人　　数：５名

教科／分野：資源・ごみ

授業時間数：（単発でも、連続でも可）　３回

場　　所：（屋外の場合は雨天時の対応も）集会所

ESD プログラムへの想い	毎日必ず出る生ごみは、もともとは野菜、穀物、肉、魚など、自然界の恵みです。 可燃ごみに含まれる生ごみ量は約３割。生ごみの約８割が水分です。 生ごみをたい肥化し自然に戻す、そして可燃ごみを運び燃やし処理するエネルギーを減らす、一石二鳥の生ごみからたい肥作りを実践する仲間を一人でも多く増やしたい。
目標	・学習者が生ごみも自然界の一部であり、自然に戻るものだと実感できる。 ・学習者が、家庭からでる生ごみを可燃ごみにせず、たい肥作りにチャレンジし楽しくできるようになる。 ・学習者が出来たたい肥を地域で活用し緑化やコミュニティの活性化に貢献する。
特徴	・生ごみの排出を減らすことができる。（３R の実践） ・住んでいる地域の自治会等と連携をしたり、将来的にサークル活動のように取り組める可能性がある。（コミュニティへの参加、活性化）
持続可能な社会づくりの構成概念	・有限性（食糧も限りがある。食の循環を考える手がかり） ・責任性（食の循環に対する責任） ・連携性（グループ内での連携、身近な地域との連携）
重視する能力・態度	・③多面的、総合的に考える力（生ごみのたい肥化は、買い物、調理、食事、後片付けという食の一連の流れ全てにかかわる。さらに植物を育てる肥料を作り、育て、食べ、たい肥を作り、という小さな循環を完成させる。どの要素も欠くことはなく、バランスよく考える力が大切。） ・⑦他者と協力する態度（都会では、自然物と触れ合うことが少なく、有機物が土の中で変化していくこと、虫との共存など、生ごみたい肥作りのノウハウから縁遠いことが多い。しかし 3 人集まれば文殊の知恵といように、数人集まればお互いに不足を補いあったり、励ましあったり、知恵や工夫を出し合うことができる。気の合う仲間協力したい。）

プログラムの流れ

時間	ねらい	方法 場所	内容
1.5	住む自治体の資源・ごみ事情を知る。	・講義 ・自治会の集会所	・自治体の資源・ごみ担当者を招き、自治体の状況のレクチャーを受ける。 ・資源・ごみについて、普段思っていることを話し合う。 ・自分のやり方を省み、改善できることを考える。

2	生ごみたい肥化の方法を学ぶ	・講義 ・自治会の集会所	・生ごみたい肥化の普及啓発活動を行っている NPO を招き、たい肥化の方法を学ぶ。
2	参加者同士で、問題、課題を共有する。	・交流会	・生ごみたい肥化は、自然相手なので教科書通りにはいかない。土と触れることの少ない人にとって、自然は未知でグロテスクな世界でもある。問題や課題を持ち寄り、楽しく続けられるように知恵やアイデアを共有する。
4	地域で発表する	・地域イベントへの参加	・生ごみのたい肥で育てた野菜を使った豚汁等を、地域のイベントで提供しながら、生ごみたい肥化と、その肥料を使って育てた野菜や植物を紹介する。そして仲間を募る。

SDGs との関連性	12.4　2020 年までに、合意された国際的な枠組みに従い、製品ライフサイクルを通じ、環境上適正な化学物質や全ての廃棄物の管理を実現し、人の健康や環境への悪影響を最小化するため、化学物質や廃棄物の大気、水、土壌への放出を大幅に削減する。 12.5　2030 年までに、廃棄物の発生防止、削減、再生利用及び再利用により、廃棄物の発生を大幅に削減する。
学校・地域等との連携上の考慮	・地域の植栽部など活動中のグループと協力できるように、心がける。
対象を発展させる可能性	地域の自治会
その他補足事項	たい肥作り（腐葉土、洗濯ネット、容器、米ぬか、生ごみ）

プログラム作成者名（団体名）：中村明子（環境パートナーシップちば）

紙博士になろう！
～調べて作って考える「私たちのくらしと紙」～

対　　象：4 年生

人　　数：30 人程度

教科／分野：4 年社会

授業時間数：4 時間

場　　所：教室、図工室などの特別教室

ESD プログラムへの想い	牛乳パック紙すきを体験する中で、ごみやリサイクルだけでなく、紙の必要性やエネルギー、森林についても考えられるような視点を重視した。紙すきは、リサイクル工作として多くの人が体験したことのあるプログラムだと思うが、自分たちのくらしとのつながりを知り、どうしたら持続可能であるか考え、行動につなげたい。
目標	・参加者が、身近にある「紙」について歴史や活用の多様さを知る。 ・紙すきを行うことで、紙が作られる過程や仕組みについて学ぶ。 ・再生し使う「資源循環」の大切さや、生活の中で自分にできることを理解する。
特徴	・「紙」について掘り下げ考え、リサイクル工作（紙すき）を行う。 ・従来の和紙の作り方と違い、それぞれがオリジナルのカラフルなハガキを作ることが出来る。また、ハガキを窓に貼って乾かすことでアイロンを使用しない。安全面、省エネ、地球温暖化防止についても学びを広げることが出来る。 ・過去にあった製紙工場における公害について学び、環境負荷について理解する。
持続可能な社会づくりの構成概念	有限性　地球上に限られた資源である水やエネルギーやごみについて知り、環境負荷の少ない生活を目指す。 リサイクルにはたくさんのエネルギーが必要になる。紙における３Ｒを考える。 多様性　同じように作っても、一人ひとりが違う個性豊かな作品ができることから、自分と人との違いを感じることができる。
重視する能力・態度	②未来：紙のリサイクルについて知り、どのような生活を心掛けるべきか考える。 ③多面：生活の中で、紙という身近なものが環境に深く多様に関係していることを知る。 ⑤参加：自由に工夫し、創作を行う。

プログラムの流れ

	ねらい	方法 場所	内容
時間 45 分	身近にあることが普通である「紙」について知る。	講義 WS 教室	①　私たちのくらしの中にある紙 紙は、私たちの生活に欠かせない。どんなものに紙は使われているか考える。教室の中にある紙を挙げる。今の社会はペーパーレスが叫ばれているが、紙がなかったら私たちの生活は、どうなるだろう？ ②　紙の歴史

			紙はいつからあったのだろう？紙がなかった昔を想像する。 ③ 紙のしくみと環境 紙の材料は木。木を細かくして繊維を取り出し、その繊維が絡まり合って出来ている。ルーペを使って断面を観察する。 過去に製紙工場でおきた公害について紹介する。
			紙のリサイクルについて学ぶ。紙は、リサイクルされ再び紙に生まれ変わる。紙パック 6 枚でトイレットペーパー1 個になる。
90分	紙作りを体験する。紙が作られる過程について学び、再生し使う「資源循環」の大切さを実感する。	体験 図工室などの特別教室	紙パックを使った紙すきを体験する。 紙パックからパルプを取り出して紙を作る。水の汚れやエネルギーはどうだろうか。紙すきを行う際に、水を使いまわしたり、出来上がった紙は窓に貼って乾かすなど負荷を減らす作り方を体験する。 同じ材料を使い同じに作るのに、同じ紙には仕上がらない。一人ひとりの作品の出来栄えをみんなで鑑賞する。
45分	紙を通して私たちの生活と世界のつながりを知る。	講義 WS 教室	今、私たちが使っている紙の材料はどこからきているのか？ 安いパルプを輸入することでおきる環境破壊や森がなくなることで生息地を追われる生き物について考える。具体的な取り組みとしてバナナペーパーを紹介する。日本の森林についても紹介し、森や自然のめぐみを考える。これまで学んだことを振り返り、私たちにできることを考える。

SDGs との関連性	11.住み続けられるまちづくり（私たちの生活の環境負荷を減らして住みよいまちをつくっていこう） 12.つくる責任、つかう責任（身近な紙について目を向けエシカルな消費を）
学校・地域等との連携上の考慮	・紙すきは、1 班 4～6 人が実施しやすい。場所は、図工室を準備の時間も含めて使えるとクラスが複数の場合、子どもが入れ替わればよいので教室より進行しやすい。 ・紙すきを行う時に使う牛乳パックを煮てパルプを取り出す作業は、放課後教室などと連携し、何人かで協力して行うとよりよいと思う。
対象を発展させる可能性	・学校文化祭などで、子どもたちが発表会を行ったり、互いに学び合うプログラムとすることができる。夏休みの自由研究としても利用できるのでは。 ・森林の重要性や世界のつながりについては、もっと適切な人や団体に協力をお願いし、いろいろな人たちと連携して学習を行うと効果的だと思う。
その他補足事項	紙すきの準備品 子ども：500ML ペットボトル（フタつき）1 本、タオル 2 枚、牛乳パック 1 枚、はさみ 学　校：ハガキの色付けのためのお花紙 3～5 色程度。できれば運動会などで使用したものを取っておいてもらう。

プログラム作成者名（団体名）：廣田　由紀江（しろくまキッズ）

森林と私たち

対　　象：小学校高学年生：各グループ 30 名位

教科／分野：自然教育と体験学習

授業時間数：室内学習に 90 分、体験学習に 90 分、自分なりの取り組みの検討に 45 分

場　　所：酒々井町の小学校を候補として考えています。

ESD プログラムへの想い	自然、特にその多くを占める日本の森に対する意識を強く持って、森の多機能（木材の提供、生物多様性の提供、森林セラピー及びストレスフリーの効果、二酸化炭素の吸収による地球温暖化防止効果等）を実感することにより、おのずからＥＳＤに寄与できるようになるのではないかと思っています。これらの効果を理解、体感してもらい、学習者に、これからの活動あるいは森の存続、整備の必要性を広める母体になってほしい。
目標	子ども達が １：森林の成り立ちの基本的な知識を習得する。 ２：人工林、里山林、天然林、荒れた森林を散策してその違いを体感する。 ３：上記の異なった森林の散策による精神あるいは肉体におよぼす違いを感じる。単にああ～ここはいるだけで気分がいいとか、なんか落ち着かないくらいの感じが持てれば十分。 ４：これらの感じたことから、森林に対して自発的に考え、行動するキッカケを作る。 ５：自然あるいは森の中に自分を置いて遊び、癒し、安らぎ等を感じ、その雰囲気を醸し出す環境に興味を持って、自分でもなんとかこのような自然環境を作ろうとする、あるいは維持したいと思うようになること。
特徴	日本は国土の２/３を森が占めるという世界でも有数の森林国家です。その日本の森に関する知識を基礎から正しく理解してもらうこと（日本には亜熱帯から令温帯までに属する森林がありますが、ここでは千葉の代表的な温帯の森の知識に絞りたいと思います。実際の体感と結びつけるためです。） 実際に色々な森を体感してもらい、その成り立ちと知識として持っている森の概念との比較を行う事が特徴となります。また、どのような森が、いて心地良く癒し効果があり、どのような森が心地よくないかも体感でき、なぜだろうと考えるきっかけを作れるものと思います。
持続可能な社会づくりの構成概念	森林に対して行動するキッカケが出来た後、いざ行動に移ろうとすると、多くの準備が必要になってきます。個々の知識、興味、専門性の多様性が要求され、従って多くの仲間が必要になります。対象森林が公有林ならば支障は少ないのですが、私有林の場合には地主との共有認識も必要となります。 またそれなりの道具も必要になってきます。次の段階としましては、森林計画を作成して、各計画段階での達成モニタリングも要求されるようになると思います。しかし、このステップはこのプログラムの次の段階になると思われます。ここでは、森は大切な自然で、なんとか保全、維持する必要があるという共通概念を持てれば成功と考えます。 必要とされる概念としましては多様性、連携性が重要だと思います。
重視する能力・態度	自然が対象なので、理屈では分からないことが出てくると思うので、子供に帰ってなぜ？なぜ？なぜ？という興味を持続して、その理由を考えられるようにしたい。また自分一人ではできないことが多々出てきますので、人とのコミュニケーションも重要になると同時に、将来的にどのように森をしていきたいか（この点は携わる人の間でもかなり違う内容になると思い

	ます）かなり話し合い、計画を立てて方向を決めなくてはならないと思うので、総合的な能力、態度が要求されることになります。 　特に要求される態度あるいは能力としては計画を立てる力、コミュニケーション力が要求されると思います。

プログラムの流れ

時間	ねらい	方法 場所	内容
90分	森に対する基本的な知識が分かるように	教室、公民館の部屋	森の定義を知り、生物多様性の必要性を理解するとともに、森を構成する動植物の役割を知る。自然の中には不必要なものは何もないという認識の上で森を見てもらうようになれば、その行動、活動のベクトルはいい方向に行ってくれると期待する。
30分	森を感じる（体験）	整備された人工林、荒れた人工林	主に杉林を対象にして、まあまあ整備された人工林と荒れた人工林（主に孟宗竹に侵入された杉林）の比較を感じてもらい、その印象を記憶してもらう。
30分	森＋里山を感じる（体験）	里山林	今はあまり残っていないのですが、谷津を中心とした里山林を見てもらい、むかしの人の生活ぶりとその自然の利用の仕方を感じてもらい、サステイナビリティを理解してもらう。
30分	自然林を感じる（体験）	鎮守の森	自然林はなかなか見にいけないので、人の手があまり入らない鎮守の森を散策して、その成り立ち雰囲気を感じてもらう。
45分	森に対する評価と今後のあってほしい森の姿の検討	教室、公民館の部屋	最初はブレーンストーミング的に意見をたくさん出してもらって、それをクラス分けする。今後の森の姿を感じてもらい、その為には何をするべきかを考え、漠然としていてもいいので、出席者に方向づけをしてもらう（ブレーンストーミング？）

SDGs との関連性	３）森林セラピー等による健康と福祉 ４）自然の仕組みを実際に感じて生涯学習のテーマとする １３）森林管理によるＣＯ２削減へささやかながら寄与する １５）「陸の豊かさを守ろう」：この目標が一番フィットする
学校・地域等との連携上の考慮	小学校 5 年生の社会の授業の中に「わたしたちの生活と環境」という項目があり、その中での体験、特に地域の自然環境についての理解と体感を通じて、より環境に親しみをもってもらうこと。紙上だけではなく実体験も大切にしたい。この為には教育委員会と協力して、授業のカリキュラムに組めれば最高！ただフィールドが近くにあることが条件になります。
対象を発展させる可能性	酒々井町には小学校は２校あり、どちらかからテスト的に始めて、効果があればもう１校に展開する。また小学生から成年に展開するには、季節を選んで、紅葉あるいは新緑、花の季節を選べば、参加者も増える可能性はあるのではないかと思います。
その他補足事項	

プログラム作成者名（団体名）：　小山　端　（酒々井里山フォーラム）

１反歩からはじまる環

対　　象：小学生

人　　数：最少 3 人

教科／分野：生態系　循環型農業

授業時間数：毎月一回

場　　所：谷津田にある休耕田

ESD プログラムへの想い	農村部では数多くの休耕田耕作放棄地を目にします。そのままにしていけば植生も生態系も変化していきます。その中で自分たちはどんな立ち位置で生きていくのか、自然と共存するために自分たちができることを調べ、ディスカッションをしていき次の世代がどんな未来をつくっていきたいかを考えるきっかけをつくっていきます。 休耕田を畑に転用、水のない場所に池を作ります。 自然農を通して暮らしを知り、池に集まる生物を観察し、この土地の生態系をしり自分も自然の一部だということ感じる時間をつくります。また、植生遷移による植生の変化も観察していきます。この経験を活かし、自然気候の変動も自分たちの努力や行動で“チェンジ”できるという自信と方法を身に着けていけることを期待しています。
目標	・学習者が休耕田・耕作放棄地の現状を理解する ・学習者が自然農を通して虫や動植物との共生を学ぶ ・学習者が池づくりを通して、自然状態での水の水位変化、貯水方法を考え、作っていく。 ・アカガエルが生息している希少動物の保護ができるよう現在の環境づくりをしていく。 ・学習者がサクセッションを通して、放棄した土地がどのように変化していくのか、変化していく中で自分たちが未来へ何ができるのか学習し考える時間となる ・トイレがないのでコンポストトイレをつくり堆肥をつくり循環型農業を整えていく
特徴	谷津田でありすでに里山として整備されている場所。 子どもたちが自然観察をしながら、周りの生態系を知り、生き物の様子から気候変動を知り、自分たちと自然の関りを感じながら学ぶことができる。 植物遷移を記録し植生変化を学ぶことができる。 農業も地域の農家さんを招くことにより農業も重視したプログラム
持続可能な社会づくりの構成概念	多様性・その地の植生と生き物を知ることができる 相互性・地域の先生をアドバイザーに迎え地域の方々と交わる 有限性・水は天から降る分しか溜まらず、水の有限性を知り、家に帰った際に水を大切に使う 責任性：休耕田が増えることで起こる環境の変化と、食料自給との関係に関心を持つ
重視する能力・態度	多面的、総合的に考える力 つながりを尊重する態度 未来を予測して計画を立てる他者と協力する態度 他者と協力する態度

プログラムの流れ

時	ねらい	方法	内容

間		場所	
1回目	谷津田の田んぼの地図（等高線あり）を渡し、自分たちがいる場所を把握する	講義 体験 谷津田 休耕田	■谷津田のできた歴史、周りとの高低差など、地形を知り成り立ちを知ることにより環境の特性を知る ・掘ってみる、地質はどんな地質か触ってみる ・歩いて実際の大きさをはかる
2回目	池をつくる 池に水がたまるには 人間が水を蓄えてきた方法を考える	体験 谷津田 休耕田	■土を掘る、水は土を掘っただけでたまるのか？ ・子どもたちからのアイデアだし ・掘ってみる。次の月へ ・ほかのアイデア御準備（粘土を塗る、粘土層がどこにあるか？探す）
3回目	畝づくりをする 草刈りをする 手刈りと機会との差を知る 食べ物をつくる	体験 谷津田	■畝づくりのために周りの草を刈ってみる ・鎌だけで草を刈ってみる ・大人が機会を使って刈り、機械との差を知る ・畝をつくり、種をまく
4回目	周りの樹木、生き物をみる 里山の生き物を見つける	体験 谷津田	■谷津田の周りにある樹木、草木、生き物を見つけ、時には捕獲し観察する
5回目	サクッセッション 植生の成長と変化を感じる	体験 谷津田	■2m×2m 四方を囲み、そこは一切手つかずのまま、1か月ごとに観察、記録をつける
6回目	池の中の生き物調査 水のある場所に棲む生き物観察	体験 谷津田	■水漏れしないようにした池で意図的に生き物を入れないでおいて、実際時間（月日）がたつとどんな生き物が現われるのか、網でとってみる
毎回	自然農 肥料も水も人為的に与えなくても野菜は育つ、自然の営み学ぶ	体験 谷津田	■人間的には水がないと思われる状態でも畝に草マルチをすることで水分が保たれていることを知る。 ・淘汰される野菜があることを知る ・四季に応じた野菜の成長を学ぶ ・育てたいものがその時期に適しているか考える
7回目	畑に現れる生き物を知る 生き物との共存 生き物からの恩恵を知る	体験 谷津田	■畑に現れるのは誰？ ・畑に残っている足跡を見る ・周りにいる虫を観察 ・作物の生命力を知る ・共存繁栄を学ぶ
8回目	収穫 できた野菜を食べてみる。恵みを感じる	体験 谷津田	■自然農の野菜を食べてみる ・畑を取り巻く1体の営みをしる ・草を刈りすぎない
9回目	トイレ ・トイレが欲しい→この谷津田の条件に合うトイレの形を考える	体験 谷津田	■トイレがない、さてどうする？ ・トイレまで歩いてみる ・お花摘み（野でやってみる）
10回目	コンポストトイレをつくる 循環型農業への提案	体験 谷津田	■コンポストトイレをつくる ・もみ殻を地域の方からもらい、関係をつくる ・置く場所を考える ・堆肥への変換

2 時 間	自然農から四季を感じ 日本の歳時記を知る	体験 谷津田	■野菜の種を撒く時期や収穫を経験し、子どもたちによる野菜の予定表をつくる ・春、夏、秋、冬の四季を感じる
3 時 間	外での活動のため 気候変動を感じ 次への対策を考える	体験 谷津田	■地球温暖化を肌で感じる ・暑すぎる、寒すぎるなど体験 ・どうすれば地球温暖化を防げるか考える
1 時 間	サクセッションを 1 年かけ 植生の変化を知る	体験 谷津田	■何もしないとどうなってくるのか ・自分たちはどう共存していけるのか ・耕作放棄地が多くなれば、食料の確保はどうするのか
1 時 間	まとめ	体験 谷津田	■開催日の毎回最後に

SDGs との関連性	2　農産物をつくることによる食料を確保、持続可能な農業を学ぶ 6.6 生態系の保護、どこでも安全なトイレをつくることができる 13.3 気候変動を感じ、環境問題を知り対策を考える 15.生態系と生物多様性を守り陸の豊かさを守る 17 目的達成に向けたパートナーシップ
学校・地域等との連携上の考慮	地域の元中学校教師の方を招いての展開をするので、ほかの地域の方との交流を広げていけます。地域の環を広げる。小学生中心のため近隣小学校を招待することも可能です。 農業に関して地域の農家さんのアドバイスもいただき、一緒に活動していきます。
対象を発展させる可能性	成田市には耕作放棄地や休耕田が多くあります。この活動を軸にし、他耕作放棄地に同じように子どもたちの居場所として広げていく可能性もあります。収穫が安定してくれば一次から三次（加工）して販売することも可能、経済の循環も考えられます。
その他補足事項	長ぐつ・長ズボン・ 熱中症対策（気温によっては室内での講義の時間のみ） 安全の確認（蜂や蛇などの注意）

＜活動カレンダー＞

プログラム作成者名（団体名）：城　順子　（成田おむすびプレーパーク）

自然再生協議会委員が土木技術者に伝える
自然再生地の使い方

対　　象：　土木技術者
人　　数：　20 人
教科／分野：　技術者の継続的学習　自然環境
授業時間数：　4 時間（単発でも、連続でも可）
場　　所：　霞ヶ浦自然再生協議会　Ａ区間　茨城県霞ヶ浦環境科学センター

ESD プログラムへの想い	・工事施工計画段階・施工中・工事完成後における、自然環境への配慮・推移をも考える土木技術者の育成 ・受講者は公共工事施工する人でもあるが、使う人でもあるので完成して終わりではない保護する生物・駆除する生物の見分け方・方法・法的問題などを質の高い学習を共に学ぶ ・環境に配慮した護岸での工事啓発で、優良工事受賞者もあり、受講後に職員の意識改革によって、環境に配慮や啓発を行い優良工事受賞・工事点数のアップ ・若手技術者活用での、環境についてのスキルアップ
目標	河川法では、治水、利水に加えて環境を加えて三本柱となっている。 工事名では、〇〇地区波浪対策工事で、沖に自然石で島を作り、波浪に対する堤防保護、水辺の動植物保護をする工事との理解を深める。 【施工計画段階】　工事事業認可で記載されている、失われた利益（自然環境）、事項の工事によって減る事の再確認 【施工中】　工事施工中の自然への配慮をする、やる気を起こす（必要以上の緑地を使わない・直ぐ戻す） 【工事完成後】　工事完成後、自然が減少していないか　量と質（単調化）の変化はないか、駆除した対象が増えすぎていないか。完成後のアフターケアー(ハード・ソフト)
特徴	・場所は自然再生推進法に基づく区間で、協議会資料が公表されているので資料が整っている。 ・プログラムを土木施工管理技士会の継続的学習を申請し外部の審査を受ける受理されれば、受講者は継続的学習のポイントが付与される ・プログラム作成者が霞ヶ浦自然再生協議会の公募委員でもあり、当地区での管理者(国土交通省）の理解を得やすい
持続可能な社会づくりの構成概念	多様性：今回の講座（河川）で学んだ事はどこにでも起こることで、道路・都市での現場でも使い回しができる 相互性：このＡ区間が、推進法での縛りもあるが、管理者(国土交通省）と業者でもあり、工事受注後、発注者との相互での信頼関係の構築ができる 有限性：自然再生された生物も有限であり、土木構造物(堤防・護岸）と同じ有限である 連続性：今回の講座は、土木技術者であるが、後継者育成プログラムにも変えて講座予定 責任性：法令順守を学ぶ　絶滅の危惧種の保護　特定外来種の駆除から、相反する事例で考える
重視する能力・態度	①みためし事業である自然再生工事を、使う立場で考える(魚が釣れるか・安全な場所か) ②このプログラムで自分の違った現場での組む力をつける（土木工事は一点もの） ③土木技術者から建築技術者へ多面的に広める工夫する　（屋根の無い土木工事・屋根を作る建築工事） ④公的な施設の部屋を借り、一般利用者と接する機会もある。現場においても、水辺のオープンスペースでもあり、一般の人が聞いてもらう事で交流をはかり ⑤企業のイメージアップ事業でも、笑顔で参加できる人材教育 ⑥環境に興味のある団体と施工業者との意思疎通から協力する態度

プログラムの流れ			
時間	ねらい	方法 場所	内容
10分	自然再生推進法・霞ヶ浦自然再生協議会設立経緯	講義	環境省パンフレット 国土交通省霞ヶ浦河川事務所ＨＰ
15分	自然再生地の動植物の推移と協議会委員との移り代わり、	講義	動植物も在来種が増えた事が確認されているが、外来種も増えてきている。 協議会メンバーの地元委員(地元生まれ）は減少の一途であり、残っているメンバー、行政（他県生まれ）は一定数が留まっている。
15分	法令遵守の難しいさ	講義	法律に基づく協議会で公開を原則となっている。また法令遵守が最重要となっている。貴重種の保護と相反する外来種駆除にも法的制限がある
1時間	保護するもの 削除するもの 何かを知る	現地踏査	自然再生地にて現場に入り、何かを探す。植物等何でも良い。湿地ではゴミが留まる。これは構造的に問題があるか無いのか。自然再生地の通路の草刈が必要か面積は
1時間	多様な価値観を考える	講義	各自、見つけた物を何故かを発表してもらう。 湿地の多目的活用で、湿地がゴミを集めてくれる場所として再認識し、今、話題のマイクロプラスチックの元（ペットボトル等）を日本から出さない施設との考えもある。
1時間	優良工事、受賞者の報告	講義	環境配慮した工事で、工事の啓発を行ったことが評価され 受賞現場での報告。 昔、蛇かご護岸→葦が生え　うなぎ漁あり 鋼矢板護岸→草は無い　漁なし 籠マット護岸→葦等が生える(予定) この説明がポイントで受賞 現在は草が生育しているが特定外来種が多く確認されている
15分	まとめ	講義	自然再生工事は「みためし」工事。 工事発注計画から施工者実施計画・施工完成までの時間と、自然再生するまでの時間の差もある。

SDGs との関連性	・質の高い教育をみんなで　４・４ ･働きがいも経済成長も　８・３ ･産業と技術革新の基盤をつくろう　９・１ ・つくる責任　つかう責任　１２・７ ・陸の豊かさも守ろう　１５・５
学校・地域等との連携上の考慮	自然再生協議会との融合の問題点 協議会の特定区間を利用してのプログラムでもあり協議会へは、プログラム内容のチェックを受けての実施とする。 協議会の行事は公開が原則であるが、参加証明等の発行が難しい。個人の利益になる証明は会の性質上の問題がある。そのために協議会委員の私がプログラムを別に作り学習会とした。

対象を発展させる可能性	霞ヶ浦自然再生協議会の委員が広報・維持管理・勉強会を開く場として使い、各種団体等にＰＲ（全国土木施工管理技士会・継続的学習講座認定）
その他補足事項	

プログラム作成者名（団体名）：城之内 健一（霞ヶ浦田村・沖宿・戸崎自然再生協議会）

防災からたどる SDGs の道

対　　象：　小学 4～6 年生（中学生も可）
人　　数：　5～6 人グループ（6 グループ程度まで）
教科／分野：　理科、社会
授業時間数：　45 分間 x 2 コマ（単発でも連続でも可）
場　　所：　室内

ESD プログラムへの想い	ガールスカウトで防災をテーマにした活動を数年続けている。被災した時に役立つワザや非常用グッズなどを備えるだけでなく、自然災害がなぜ近年増えてきているのかと疑問を持ち、気候変動による影響が大きいことを子どもたちに気づいてほしい。 「防災」から、【11 住み続けられるまちづくりを】や【13 気候変動に具体的な対策を】などにつなげられ、世界規模の大きな課題に対しても自分たちの日常生活を見直すことによって解決の道が見いだされることを一緒に考えていきたい。
目標	子どもたちが災害に備える工夫を知り、自分ができることを見つけられるようになる。 子どもたちが、気候変動により引き起こされる災害に関心を持ち、その理由を考えられるようになる。 子どもたちが、地球環境のよいサイクルを生み出すために自分のふだんの生活の中でできることを見つけ、実践できるようにする。 自分たちが考えた工夫や実践したいことを、家族や友だちなど他の人たちにも伝えられるようになる。
特徴	防災と地球温暖化の問題を結びつける手立てを「身近な生活の中で備えること」と考えた。 災害を予測し普段から備えようとする意識は、未来の地球環境の変化を予測し悪化を食い止めるために、一人一人が現在の暮らし方を見直すことに通じるものと考える。
持続可能な社会づくりの構成概念	多様性：　気候変動による自然災害が起こる要因を多面的にとらえる 相互性：　人の暮らし、生き物の命、環境について相互的に考える 有限性：　資源の有限性や自然の循環に気づく 責任性：　地球環境について自ら考え行動するという意識を持つ。 連携性：　家族、地域の連携から、地球規模の連携・協力までの繋がりを知る
重視する能力・態度	現在の地球環境から予測できる未来を想像し、希望を掲げて未来を創る作業に自らが関わろうとする・・・①批判的に考える力、②未来像を予測して計画を立てる力、③多面的、総合的に考える力 グループワークにより多様な意見を受け入れ、その中から自分たちのビジョンを定め共有していく、そして他者に伝えていく・・・④コミュニケーションを行う力、⑤進んで参加する態度、⑥つながりを尊重する態度、⑦他者と協力する態度。 以上 7 つの他に、未来に希望を持ち自分たちが変えていけると信じる気持ち

プログラムの流れ

時間	ねらい	方法 場所	内容
15 分	①【導入～やってみる】身近なモノを使って防災グッズを作ってみる	グループ 室内、	ポリ袋（ゴミ袋）を使ってレインコートを作る ポリ袋やその他の日用品を利用して災害時に使えるもの、工夫できるものを考え、出し合ってみる
10 分	②【気づく】自然災害とその原因を探る	グループ 室内	どんな自然災害があるか、なぜそれが増えているのかについてグループで話しあう。

10分	③【知る・感じる】地球の現状とこのままの未来予測	グループ 室内	映像や資料による地球温暖化の今と未来予測を見る 【例】河川の氾濫した町、ゲリラ豪雨が流れ込む地下街、台風の暴風雨による被害、土砂崩れ、竜巻、熱暑、おぼれるシロクマ、海に沈んでいく島･･･など 「気持ちカード①」に今の自分の気持ちを記入する(オノマトペ)
10分	④【考える】未来は変えられる？ 誰が変える？ 変えるためには？	グループ 室内、	自然災害に備えるためにできることを考えてみる。 それらを自分にとって近い、遠い（自分ができる、国や市や団体でできる）ことで分けてみる 次に、今すぐできること、時間がかかること（これから 10 年間でできること）に分けてみる
45分	⑤【伝える】自分の気づきや考えを誰に伝える？どこに広げる？	グループ ＊作業は室内外で可。基本的に会場付近で。	④で考えたことを伝える＆広げるために「インスタグラム（写真）」をグループで制作（載せる写真＆メッセージを考えて制作する） インスタグラムのキーワードは、「そうだ！やってみよう！」（この方向性で独自の言葉にしてもよい） 発表＆シェアリングタイム･･･発表者以外は「いいね」や「コメント」で評価 発表を終えての気持ちを「気持ちカード②」に記入（オノマトペ）

SDGs との関連性	4.　質の高い教育をみんなに 7.　エネルギーをみんなに そしてクリーンに 11.　住み続けられるまちづくりを 13.　気候変動に具体的な対策を 17.　パートナーシップで目標を達成しよう
学校・地域等との連携上の考慮	小学校の防災倉庫や避難所としての役割、近隣の公園の防災システムなどをわかりやすく盛り込み、学校や地域が災害時に果たす役割を知ることができるようにする。 このプログラムへの取組みをきっかけにして地域・学校の防災活動に興味を持つようになり、自分事として関われる防災・地球温暖化防止に繋がる。
対象を発展させる可能性	中学生対象の場合は、インスタグラム（写真）の他に動画制作をすることも提案できる。 プログラムへの取組みから、気持ちを作文や詩で表現、標語を作成、啓発ポスターを作成、防災・減災のアイコンとしてのオリジナルキャラ開発、データ分析から未来予測へのプログラミングなど、発展の可能性が考えられる。
その他補足事項	地球温暖化の現状や未来予測を伝える映像や資料など（プラネタリー・バウンダリー） 「気持ちカード」①現状を知って、②できることを考えて、③伝え広めた後に、が記入できるようにする。 インスタグラムのための装置・小道具など、いいね！シール（or カード）

プログラム作成者名（団体名）：　柴田加寿子（ガールスカウト千葉県第 63 団）

こどもたちの力を借りて地球を救おう！
こどもは世界を癒す、創造力の種

対　　象：小学生

人　　数：プログラムによって異なる

教科／分野：主体性を持った体験活動

授業時間数：プログラムによって異なる

場　　所：室内・屋外どちらでも

ESD プログラムへの想い	国連の温暖化対策サミットで各国の代表を強い口調で非難し、早急な温暖化対策を求めたスウェーデンの 16 歳のグレタ・トゥーンベリさん。地球温暖化対策を求める運動をたった一人で始めました。彼女の思いが若い世代に共感を呼び、世界中で経済優先・見て見ぬ振りをしている大人に代わり、若者が地球を救おうとしています。 こどもの世界は平和で、人種差別も障害の有無もありません。また、こどもたちには、自然と共生できる感性を持っています。そのこどもたちの力を借りて、大人たちを感化していき、人種・障害すべての壁を越えた活動を創っていきたいと思います。そのためには、こどもたちが自ら考え、自ら実行していく環境づくりを考えていきたいと思います。 子どもの持つ限りない可能性が引き出され、子どもは視野を広げ、子どもならではの視点と創造力で活動を展開し、周囲の大人を感化していき、地球を救っていくことを祈る。
目標	・体験者が地球の一部だという感性を育む。 ・体験者が主体性を持って社会に貢献できる人材になり、自ら行動に移すことができる。 ・体験者が自己肯定感を持ち、他者を思いやる心が育つ。 ・体験者が自分の思いを伝えることができ、自らの成長を感じることができる。 ・体験者が多様な人に関わることにより、多様性が育ち、視野を広げることができる。 ・体験者の言動により、周囲の大人が感化され、社会を動かす。
特徴	・結果を求めず、プロセスを大切にする。 ・活動の出口を定めず、体験者の求める方向性を支援し実施へと導く ・話し合いや活動するにあたってのルールづくり等も体験者どうしで決定していく
持続可能な社会づくりの構成概念	・多様性は活動を通していく中で、いろいろな人・もの等に出会う ・相互性は社会の多様な主体等との連携の中で相関していく。 ・有限性は活動を通して、地球上にあるものやことに限りがあることを理解していく。 ・責任性は自ら考え、自ら行動することで自ずと責任性が育まれる。 ・連携性は多様な主体が関わり、課題を皆で共有し実践していくことで実感していく。 ・公平性はこどもを含め、一人一人が大切な存在であることが認められ、実感として持てる。

重視する能力・態度	①批判的に考える力、②未来像を予測して計画を立てる力、③多面的、総合的に考える力、④コミュニケーションを行う力、⑤進んで参加する態度、⑥つながりを尊重する態度、⑦他者と協力する態度

プログラムを行う上での条件設定

時間	ねらい	方法 場所	内容
2時間	こどもの力を知ってもらい、こどもの力を借りた地域づくり等の実践場所の確保	講演会・ワークショップ 社会教育施設等	・子どもの世界観への理解 ・子どもの力への理解 ・子どもが主体となった活動事例の紹介 ・子どもたちが主体的に活動できる環境づくり ・実践場所へのサポート体制の説明
2時間	子どもが主体的に活動できる環境づくりのための、子どもに関わる支援者のための研修	講演会・ワークショップ ケーススタディ 実践場所	《子どもが主体に活動できるための関わり方や姿勢》 ・口も手も出さない ・子どもの力を信じる ・見守りの姿勢 ・与えるのではなく、気づきを導く ・その場、その時間を子どもと共有する ・固定概念を捨て、今の状態から判断する ・その場を一緒に楽しむ ・お天道様が見ている
実践場所による	子どもたちの力を借りた地域づくりのモデルとしての活動事例を創る	手を挙げて頂いた実践場所の方法や場所による	・手を挙げて頂いた主催団体等のニーズを共有しながら企画づくりをする ・参加していただく子どもを募集する ・実践のなかで気づいたことを主催団体と共有していく ・実践終了時に、活動報告書としてまとめ、モデルとして紹介する資料を残す
	【実践場所例】① ・事前研修：２時間 ・企画会議：２時間 ・講座:３０分×５回程度 ・定員：１０名くらい	研修講座 ワークショップ 柏市リサイクルリボン館	**『子どもたちが先生！風呂敷の活用講座』** ・子どもたちを募集し、事前に風呂敷の使い方を学ぶ。 ・子どもたちに、リサイクルリボン館主催の『リサイクルフェア』での講座の企画を考えてもらう。 ・当日に、コーナーを設けて、子どもたちが考えたやり方で、来場者に対して、講座をしてもらう。
	【実践場所例】② ・ワークショップ:４０分 （学校の授業単位）	ワークショップ 実践会場	**『日本の伝統の良さ　ふろしき体験教室』** ・地球温暖化（レジ袋の代用としての風呂敷活用）の説明 ・風呂敷の歴史を説明

	定員：３５名くらい	小学校等	・風呂敷の活用例を実践する ・子どもたちに風呂敷の活用法を考える ・家庭に帰り、親と一緒に活用する
	【実践場所例】③ ・研修：２時間 ・運営会議：３時間 ・実践:週１回５時間程度 ・イベント出店：５時間程度 ・定員：１０名くらい	研修 会議 実践 柏市光ヶ丘地域の空き店舗	**『駄菓子屋　こども天国』** ・環境づくりをサポートする人材の募集と研修 ・駄菓子屋を運営する子どもを募集する ・子どもたちと運営会議をする ・子どもたちが考えたやり方で、月１～２回、光ヶ丘地域のコミュニティスペースで駄菓子屋を運営する ・１１月の地域イベント『ふれあいまつり』に出店して地域の大人たちに子どもの力を感じてもらう

SDGs との関連性	④質の高い教育をみんなに　⑦エネルギーをみんなに、そしてクリーンに ⑰パートナーシップで目標を達成しようなど、将来的にはすべて関連する。
学校・地域等との連携上の考慮	活動の趣旨を理解してもらい、賛同者を増やしていく。 また、それぞれの立場を理解し、お互いに必要と思える関係性をつくり、協働して行う。 　特に、学校との連携の場合、学校のカリキュラム（総合学習時間等）や実施時間、また対象学年に合わせたプログラムの策定・対象人数（クラス別や学年単位）など学校側との丁寧な打ち合わせが必要だと思う。
対象を発展させる可能性	新たな活動を立ち上げる支援のみでなく、賛同者の既存の活動に、この趣旨を加える形式も併用していく。 体験者がその後、主体的に支援者となり、活動や対象者が長期的に発展していく。
その他補足事項	風呂敷は参加人数分を貸し出すことが可能

プログラム作成者名：村田静枝（一般社団法人 ふろしき研究会　千葉支部）

親子で学ぶ　ＳＤＧｓ・ＥＳＤ

対　　象：小学生の親子（３年生以上）

人　　数：２０～４０名

教科／分野：環境保全・生物多様性

授業時間数：４時間（２日間）

場　　所：八千代市農業交流館及びほたるの里と近辺

ESD プログラムへの想い	・子どもも大人も知らない事や、ニュースでの話には大きな期待と夢を持つ。知ることで自分の暮らしや将来を考えるきっかけとする。 ・子どもも大人もＥＳＤ、ＳＤＧｓのお話を聞き、掘り下げのプログラムに参加する事で社会参加の一歩を踏み出してほしい。
目標	・学習者がＥＳＤ，ＳＤＧｓのお話を先ず聞くことで、自分事として出来ることを考えるようになる。 ・学習者が自然環境をはじめいろいろな事に興味を持つようになる。 ・学習者がさまざまな取り組みを知ることで他者（先人）の取り組みを理解する。 ・学習者が何かできる事を自分で考える。 ・学習する事で大人は取り組みを理解し、子どもは小さい時から日常の事とする事で学びが身に付き、後の社会参加となる。
特徴	・身近な事柄からでなく壮大な事項から学ぶことで視野が広がり目標がもてる。 ・掘り下げをすることで、身近な事柄の大切さに気付く。 ・自分で考え、人の意見を聞く（グループワーク）をする。 ・１日目と２日目の間に出来そうな事、実行したいと思う事、興味がある事の調べもの等をまとめて発表し、その中の一つとして八千代市ほたるの里まで出て発展させる。（グランドワーク）
持続可能な社会づくりの構成概念	・多様性―１日目の終わりに家庭で出来そうな事や興味を持った事を話し合ってくる。２日目に発表する場を設ける事によっていろいろな意見を聞く。 ・相互性―お話を聞き、考え、様々に思う事の発表を聞くことになる。それは多面的である。 ・有限性―話し合う中で、様々な限りあるもの（水やゴミの焼却、環境保全等）が話題になると考えられる。 ・責任性―お話を聞く事で自分事として考え、出来る事を出来るだけする。また、しようと行動する。
重視する能力・態度	①批判的に考える力 ②未来像を予測して計画を立てる力 ③進んで参加する態度 ④他者と協力する態度

プログラムの流れ

時間	ねらい	方法 場所	内容
１日目 １、(30 分) 休憩(10 分)	視野を広げる	お話 八千代市 農業交流館	・知ることから始める。 ・ＥＳＤ，ＳＤＧｓの子どもも分かるようなお話。

１日目 ２、 （1 時間 30 分）	出来ることから始めるきっかけをつくる	グループワーク 八千代市農業交流館	・自分事として未来像を考える。 ・グループワーク１７目標のどの分野が気になったか、数名でグループになり話し合い～発表（現状、行動、未来予想の気付き） ・気になったことや興味を持った事を家で話し合い２日目に発表１～２分に以内にまとめてくる宿題をだす。 （少し早く終了し、次回の時間が延びる可能性を告知する）
２日目 ３、 （30 分） 休憩 （10 分）	興味を持ったことを 他者に伝える事で後の行動力に発展させる ほたるの里の価値を知る	発表 八千代市農業交流館	・どんな事を家族で話し合ったか。 ・出来る事、やれそうな事の発表。 （１７目標の中でどれになるか） ・主催者として八千代の環境やほたるの里のお話し
２日目 ４、 （1 時間 30 分） 散策移動含む	身近に出来る活動を知る 保全の大切さを学び 未来を創造する	フィールドワーク 八千代市農業交流館 ほたるの里 農業交流館	・ほたるの里を例として見てみよう ・ほたるの里までの川や道の観察と気付き（生き物やゴミ等） ・ほたるの里のお話しや観察（環境保全・生物多様性・生態系のお話し） ・子どももできるボランティア紹介 ・農業交流館に戻り振り返り、気付きの発表とまとめ
SDGs との関連性	・お話しで学ぶ事でＳＤＧｓのすそ野を広げる事となる。１７目標のお話しを分かりやすく聞く。 ・２日間のプログラムにする事で考える時間を持つ事ができ、自分事として未来を創造することが出来る。 ・親子で関心を持つ事で生活の中に浸透し持続可能であると考えられる。 ・１７目標の１５（陸の豊かさも守ろう）＝八千代市ほたるの里やその近隣を視察する事で環境保全や生態系、生物多様性の気付きを促す。		
学校・地域等 との連携上の考慮	・身近な地域の参加者を優先する。 ・近隣学校・ＮＰＯ子どもネット八千代に参加の働きかけをする。（ポスター掲示、チラシ配布等）		
対象を発展させる可能性	・大人対象のプログラムとしても活用可能である。 （１日目　１の時間、ＥＳＤ，ＳＤＧｓのお話を大人用に変更）		
その他補足事項	・会場を抑える。（八千代市農業交流館予定） ・八千代市ほたるの里実行委員会の賛同を仰ぐ。（役員会） ・参加費を算出する。（５００円程度） ・日程を検討する。（夏休み）		

プログラム作成者名（団体名）：武田みどり（八千代市ほたるの里づくり実行委員会）

プログラム作成団体紹介

＊2019 年「SDGs の目標達成のための ESD 担い手育成事業」に参加いただいた皆さまが所属する団体の活動の概要をご紹介いたします。なお、団体に関するご質問の場合は、
事務局 NPO 環パちば（ E-mail info@kanpachiba.com TEL 090 8116 4633）までご連絡ください。

浦安三番瀬を大切にする会

1999 年に始まった浦安三番瀬クリーンアップ大作戦を継続していくため、実行委員会を支える団体として 2003 年に立ち上げ、実行委員会事務局の他三番瀬クリーンアップ（プラごみ一掃作戦）の毎月開催や、三番瀬を市民に知ってもらう活動として体験活動、三番瀬水槽の管理などしています。
HP：http://ura3banze.ciao.jp/

温暖化防止うらやす

浦安市地域の地球温暖化防止活動を、千葉県地球温暖化防止活動推進員が中心に、ゆるやかな運営を基本に活動しています。具体的には、浦安市環境フェア・市民活動フェスティバルへの参加での啓発活動、分科会活動として市民の環境意識アンケート調査、環境学習プログラム開発などをしています。
また、市の環境学習アドバイザーとして小学校、公民館等で環境出前講座を実施している会員もいます。 http://ohnishi.ecnet.jp/dummy/OnBouUrayasu

柏 段ボールコンポスト研究会

霞ヶ浦田村・沖宿・戸崎自然再生協議会

この地域の特色と変貌を踏まえ、自然の力を借りながら変化に富む水辺空間を再生し、かつての霞ヶ浦に普通に見られた動植物を呼び戻し、憩いの場・環境教育の場として役立つこと、人と自然が共生してゆくことを願って。
「多様な動植物が生育・生息し、里と湖との接点を形成する湖岸帯の保全・再生を図る」
※協議会資料より抜粋

ガールスカウト千葉県第 12 団

イギリスで始まったガールスカウトは、現在は 150 の国と地域に広がり、日本では 2020 年に 100 周年を迎えます。少女や若い女性だけでなく、様々な世代の女性が一緒に学び活動しています。
千葉県第 12 団は、柏市で活動しており、キャンプなどの野外活動の他、コミュニティガーデンのお手入れ、特別養護老人ホームの清掃など地域での奉仕活動を行っています。一方で暴力に対するキャンペーンなど、人権教育にも取り組んでいます。
https://www.facebook.com/girlscouttroop12chibajapan/

ガールスカウト千葉県第 63 団

イギリスで始まったガールスカウトは、現在は 150 の国と地域に広がり、日本では 2020 年に 100 周年を迎えます。少女や若い女性だけでなく、様々な世代の女性が一緒に学び活動しています。千葉県第 63 団は、千葉ニュータウン地域（白井市・印西市）で活動しており、キャンプなどの野外活動や地域でのボランティア活動の他、福島ひまわり里親プロジェクトで 3.11 の被災地福島の支援活動を 8 年間続けています。近年は、自分ごとで考えるジェンダー教育プログラム、防災減災プロジェクトや SDGs などにも取り組んでいます。

https://www.facebook.com/gschiba63/

こどもエコクラブ　しろくまキッズ

私たちは、“こどもエコクラブ”に登録している環境活動クラブです。千葉県主催の「こども環境会議ちば 2016」に参加したことがきっかけで始まり、自分たちのできる身近な環境活動に自由に取り組んでいます。「ソーラークッキング」や「紙すき」などの活動をまとめた壁新聞は令和元年度、千葉県代表に選ばれました。（公財）日本環境協会がこどもエコクラブ全国事務局として、活動のサポートをしてくれています。「こどもエコクラブ　しろくまキッズ」で検索ください！

酒々井里山フォーラム

2001 年に発足した里山整備の団体です。活動の内容は、酒々井町の谷津田に隣接した自然の整備再生、及びその周りの杉林等の管理がメインですが、耕作放置になりそうな畑地を利用した農園芸体験、小学校の校庭のビオトープの整備等が主な活動になっています。自然の中の作業を媒体として、会員同士あるいは他団体との協働イベント等を通して、和気あいあいと作業を楽しむのをモットーとしています。是非一度見に来て頂ければ幸いです。HP は「酒々井里山フォーラム」で検索して下さい。

成田おむすびプレーパーク

団体のブログです。活動の様子をご覧ください。

https://ameblo.jp/naritaomusubipure-pa-ku/

一般社団法人 ふろしき研究会

日本の暮らしの文化の象徴でもある、ふろしきの再使用性、多用途性に着目し、時代にあった新しいふろしきの包み方や使い方を提案し、使い捨てのない暮らしや文化を次世代につないでいこう、という目標を掲げ、１９９２年に発足。マイバックとしてのふろしき活用とレジ袋削減を呼びかけています。環境学習のツールとして活用し、全国各地でふろしき包み方出前講座を行い、自治体や地域主催の催しに出展するなど幅広く活動しています。

八千代市ほたるの里づくり実行委員会

生きものを通して、自然の仕組みを理解し共生するため、ホタルをはじめ、多様な生物の生息環境づくりを、市民・企業・八千代市とのグラウンドワーク方式で進めています。1998 年に設立後 20 年過ぎ、植物や水辺の生き物が住める環境づくりが評価され、生物多様性保全上重要な里地里山に環境省より選定されました。おや子生き物探検隊、生き物観察会、里の整備活動、里山保全協議会との連携　など活動しています。　http://www.city.yachiyo.chiba.jp/123508/page000009.html

WAcKA

環境汚染に影響のある第二の産業と言われる繊維産業。中でも大量廃棄される新品衣料に着目し、アップサイクルと言う手法で課題解決を目指しています。その工程では障害や外国にルーツを持つなどの理由で社会に生き辛さを抱える方の就労支援を行っています。また 3 世代が集う場、楽しく環境貢献を合言葉に参加型の場づくりを行っています。

環境省主催　グッドライフアワード 環境と福祉賞 受賞　https://wacka.jp

特定非営利活動法人 環境パートナーシップちば(NPO 環パちば)

前身の環境パートナーシップちばが 20 年経ち、平成 30 年 1 月に法人格を取得しました。会の目的は、環境活動の推進と充実を図るため、市民・団体・企業・行政・学校とのパートナーシップのもと、「持続可能な開発に向けた目標(SDGs)」や「持続可能な開発のための教育(ESD)」の視点を意識して、さらなる持続可能な社会の実現をめざすことです。具体的には、環境講座、エコメッセちば事務局機能、多様な主体との協働へ取り組んでいます。　http://kanpachiba.com

ESDとは

ESD （Education for Sustainable Development）とは、「一人ひとりが世界の人々や将来世代「 持続可能な社会の実現に、また、環境との関係性の中で生きていることを認識し、持続可能な社会の実現に向けて行動を変革するための教育のこと」を言います。

具体的には、単なる知識の習得や活動の実践にとどまらず、 日々の取組の中に、持続可能な社会の構築に向けた概念を取り入れ、問題解決に必要な能力・態度を身に付けるための工夫を継続していくことが求められています。

持続可能な社会とは、将来の子どもたちも含め、みんなが幸せに暮ら せる社会です。その実現に向けた様々な課題について、各課題の構造（多様性、相互性、有限性）や、その解決に向けた行動が備えるべき要素（公平性、連携性、責任性）を正しく理解し、その解決策を見出すことが必要です。

あなたの取り組みをESDの視点でとらえてみましょう。

[課題の構造に関する概念]

多様性　自然・文化・社会・経済は、多種多様な事物から成り立っています。そうした多様性を尊重するとともに、事物・現象を多面的に見たり考えたりすることが大切です。

相互性　自然・文化・社会・経済は、互いに働きかけあうシステムであり、人もそれらとつながりをもち、人同士も関わり合って相互に作用していることを認識することが大切です。

有限性　自然・文化・社会・経済を成り立たせている環境要因や資源は有限であり、それらに支えられた社会発展には限界があることを知ると ともに、将来世代のために有効に使用していくことが大切です。

[課題解決に向けた行動が備えるべき要素に関する概念]

公平性　持続可能な社会の基盤は、一人一人の人権や生命が尊重されることです。権利の保障や恩恵の享受は公平である必要があり、地域や世 代を超えて保持されることが大切です。

連携性　持続可能な社会の構築・維持には、多様な主体の連携・協力が不可欠であり、意見や立場が違っても、適宜順応・調和を図りながら、 互いに協力して問題を解決していくことが大切です。

責任性　持続可能な社会を構築するためには、一人一人が責任と義務を自覚し、望ましい将来像に対する責任あるビジョンを持って、他人任せにせずに自ら進んで行動することが大切です。

現実に直面する課題の発見・探究・解決の過程で、自らが持続可能な社会づくりに関する価値観を身に付け、自らの意思を決定し、行動を変革してくことができるようになるには、以下のような能力・態度を身に付けることが必要です。

あなたの取り組みを ESDの視点で工夫してみましょう。

進んで参加する態度

集団や社会における自分の発言や行動に責任をもち、自分の役割を理解するとともに、ものごとに主体的に参加しようとする態度

つながりを尊重する態度

人・もの・こと・社会・自然などと自分とのつながり・かかわりに関心をもち、それらを尊重し大切にしようとする態度

他者と協力する態度

他者の立場に立ち、他者の考えや行動に共感するとともに、他者と協力・協同してものごとを進めようとする態度

コミュニケーションを行う力

自分の気持ちや考えを伝えるとともに、他者の気持ちや考えを尊重し、積極的にコミュニケーションを行う力

多面的、総合的に考える力

人・もの・こと・社会・自然などのつながり・かかわり・ひろがり（システム）を理解し、それらを多面的、総合的に考える力

未来像を予測して計画を立てる力

過去や現在に基づき、あるべき未来像（ビジョン）を予想・予測・期待し、それを他者と共有しながら、物事を計画する力

批判的に考える力

合理的、客観的な情報や公平な判断に基づいて本質を見抜き、ものごとを思慮深く、建設的、協調的、代替的に施行・判断する力

（出典：環境省「ESDって何だろう？」）

SDGsとは

SDGsとは、「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の略称であり、2015年9月に国連で開かれたサミットの中で世界のリーダーによって決められた、**国際社会共通の目標**です。 このサミットでは、2015年から2030年までの長期的な開発の指針として、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択されました。この文書の中核を成す「持続可能な開発目標」をSDGsと呼んでいるのです。SDGs は「17 の目標」と「169 のターゲット(具体目標)」＊でできています。

＊ ：国際連合広報センターHP「持続可能な開発の目標について」を検索ください。

目標 1 あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ
目標 2 飢餓をゼロに
目標 3 あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を推進する
目標 4 すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を 促進する
目標 5 ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る
目標 6 すべての人々に水と衛生へのアクセスを確保する
目標 7 手ごろで信頼でき、持続可能かつ近代的なエネルギーへのアクセスを確保する
目標 8 すべての人々のための包摂的かつ持続可能な経済成長、雇用およびディーセ ント・ワークを推進する
目標 9 レジリエントなインフラを整備し、持続可能な産業化を推進するとともに、 イノベーションの拡大を図る
目標 10 国内および国家間の不平等を是正する
目標 11 都市を包摂的、安全、レジリエントかつ持続可能にする
目標 12 持続可能な消費と生産のパターンを確保する
目標 13 気候変動とその影響に立ち向かうため、緊急対策を取る
目標 14 海洋と海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する
目標 15 森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、土地劣化の阻止および逆転、ならびに生物多様性損失の阻止を図る
目標 16 公正、平和かつ包摂的な社会を推進する
目標 17 持続可能な開発に向けてグローバル・パートナーシップを活性化する

出典：国際連合広報センター

◆このプログラムをお使いになる前には、以下ご注意願います◆

・ここに掲載したモデルプログラムの著作権は、作成者（作成団体）に帰属します。

・ここに掲載したモデルプログラムをご使用の際は、特定非営利活動法人環境パートナーシップちばに連絡願います。

ESD 地域リーダー人材育成のための「ESD プログラム」ガイドブック　2019

発行　　特定非営利活動法人環境パートナーシップちば
発行日　2020 年 3 月 25 日
連絡先　特定非営利活動法人環境パートナーシップちば
e-mail　info@kanpachiba.com
電話　090-8116-4633
http://kanpachiba.com/